
魔導士ルーファス（改行いっぱいバージョン）

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導士ルーファス（改行いっぱいバージョン）

【Nコード】

N6134J

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

へっぽこ魔導士と個性豊かな仲間たちの笑劇（衝撃）。自己中魔女を引き金に、仔悪魔少女がノリノリで、アクシデントの嵐が吹き荒れる。そして、あざ笑う変人ネコミミ魔導士。へっぽこ不幸体質ルーファスの受難は続く……。魔法学園モノコミカルファンタジー！ 魔導士ルーファス（無印）を小説家になろう用に改行した作品です。

第1話「桃髪の仔悪魔（1）」

ガイアと呼ばれるこの世界には、魔法を使える魔導士と呼ばれる者たちが数多く存在している。

世界にその名を轟かす魔法大国アステア王国には魔法を教える学校が存在する。

その中の一つ、クラウド魔導学院と呼ばれる学校は、クラウドが即位したときに一緒に建設された。

その学院は魔導を極めんとする13歳から18歳までの男女が通う学院がある。

この学院は今年で創立15年周年を迎えることとなったのが、今この学院では創設始まって依頼の問題児を抱えていた。それもひとりではなく、複数の問題児がいることが問題なのだ。

中でもこの生徒の問題児ぶりは、ヒドイ。

その生徒には根本的な問題があり、それを直さない限りは、ずっとあの名で呼ばれるだろう。この学院の生徒たちはその人物のことをこう呼ぶ、『へっぽこ魔導士ルーファス』と。

パステル風の色を使った石やレンガなどで作られた建物の色調が柔らかく、明るく澄んだ感じの町並みを舗装された石畳に沿って進み、噴水のある広場を抜けたその先にクラウド魔導学院がある。

この学院の歴史は浅いが、名門と呼ばれる魔導学院だ。

その学院内にある実習室で、魔導法衣をきつちりと着こなしながらも、灰色がかったアイボリーのサラサラヘヤーを後ろで適当に束ねた長身の青年が、顔を緊張の色に染めていた。

今その青年は、悪魔召喚を担当とする黒尽くめの教師　ファウストの元、追試を受けている真つ最中だった。つまり、ここにいる青年は前回のテストで赤点を取ってしまったということだ。

そう、その追試を受けている青年こそが本日16歳になったばかりの魔導士（仮）のルーファスだった。

「ファウスト先生……これに火を点けるんですけどよねえ？」
「自分で考えなくては追試の意味がないだろう（全く、世話の掛かる生徒だ）」

腕を組むファウストは深く息を落とした。彼がため息を付くのも無理はない。なにせ、ルーファスは追試の常連だ。この学院も滑り込みで入学した。

真剣な顔をしたルーファスはファウストが見守る中、初歩魔法で人差し指の先に小さな火を出し、香炉に灯し香を焚いた。悪魔の好む匂いが狭い部屋の中に充満していく。

「ファウスト先生、あの、ここで呪文唱えるんですよ（あゝ、だんだん緊張してきたなあゝ）」

「呪文を唱えている最中はそれだけに集中しろ、呪文とは関係のない言葉を一言でも発したら失敗だからな」

腕まくりをしてルーファスは魔導書を開くと、悪魔を無償で奉仕させる為の呪文を唱え始めた。これを唱えなければ願望を叶える代償に魂などを求められてしまう。

ルーファスは一字一句間違えないように、魔導書を食い入るようにして顔を近づけ、慎重に呪文を唱えていたのが、そんなルーファスに不幸が襲い掛かった。

今回悪魔を呼び出す為に使った香は、ルーファスにとって今までに使用した事のなかった香だった。それが不幸を呼んだ。

「……………っ!? (な、なんか身体がムズムズする)」

どうやらルーファスはこの香のアレルギーだったらしく、香炉から上がる煙を吸い込む度に全身のかゆみなどに襲われる。

「(も、もう我慢できない!!)……………は、は、はつくしゅん!!」

ついにルーファスは呪文詠唱中に大きなくしゃみをしてしまった。これはマズイ。非常にマズイ事態が起きてしまった。

ルーファスはすぐさま助けを請うべく近くにいたファウストの顔を見たが、彼は蒼い顔をしていた。

「ルーファス失敗だ。悪魔に憑かれているぞ、おまえ(私が付いていながらなんたる失態だ、ククツ)」

「え、ええ! どこですか!? (……………これってヤバイのか?)」

召喚は完全に失敗したのだ。『は、は、はつくしゅん!!』と言

葉が呪文として認識されてしまった。

だが、悪魔の姿は見えない。しかし、声が聞こえた。

「イエーイ！ ビビちゃんこの世界に召喚だよ〜ん！」

悪魔の声はルーファスの影から発せられていた。しかも、その声は、若い乙女の声っぽいではないか!?

ルーファス&ファウスト沈黙。悪魔の声にちよつと戸惑い。まさか、いきなりハイテンションで来られるとは思ってもみなかったのだ。

そんな二人にはお構いなしで悪魔は勝手におしゃべりを始める。

「えっと、アタシの名前はシェリル・ベル・バラド・アズラエル、相性はビビ、よろしくね これでも魔界ではちょ〜可愛い仔悪魔でちよつとは名前が知られているんだからね」

悪魔はルーファスの影の中じゃべっているので真の姿は見えない。そんなしゃべる自分の影をルーファスは泣きそうな顔で指差した。

「ファウスト先生……どうしましょう？（悪魔ですよ、悪魔!）」

仔犬のような瞳でファウスト先生のことを見つめるが、ファウストはルーファスの事を莫迦にしているのか、この状況を楽しんでいるのか、口元を歪め微笑している。

「取り憑いた悪魔をどうにかしないと赤点決定だ（クク、全く世話

の焼ける生徒だ」

口元に手を当てせせら笑うファウストは、咳払いを一つしてさっさと職員室に帰ってしまった。

残されたルーファスは、大ショック！ ルーファス的大ショック！！

「せんせえ〜……（ぐすん）」

床に膝を付き、手を伸ばすがファウストの姿はもうそこにはない。情けないとしか言いようのないルーファスがここにいた。

そんなルーファスに見かねてかどうかはわからないが悪魔が声をかけてきた。

「男の子のクセして情けないよお、アタシのパートナーになったからにはしっかりしてくれないとお〜（こんなのに召喚されてついでないなあ〜）」

自分の影を見つめるルーファスがぼそりと呟いた。

「……還ってくれないかなあ？」

「え、何？（還れ？）」

「あの、その、間違っって召喚しちゃったわけだし……その、え〜つと（早くどこかに行っって欲しい……ぐすん）」

「ええ〜っ、うっそ〜！ アタシのこと間違っって召喚したの？（このアタシを間違っって召喚だなんて失礼しちゃう）」

悪魔にしてみれば間違っって召喚されるなどとんでもないことだが、

ルーファスとしては穏便にお帰り願いたかった。

「えっと、だから、還って!」

「ダメだよ、呼ばれたからにはタダじゃ還れないね。うん、魂とか貰わないと……」

ルーファスのシヨック!

「た、魂いゝ!! (こ、殺されるの!?)」

「当たり前だよ、アタシとアナタの契約の代償は魂になってるんだから」

「だから、それは間違ってる…… (私は天に召されてしまうのか……ぐすん)」

ルーファスは今、命の危機さらされてしまった。しかも、自分の失態で……情けない。情けなさすぎである。

絶望の淵に追いやられ、わけのわからなくなってしまったルーファスは、天を仰いで民謡を歌い始めた。

「あひるさん、あひるさん、溺れた、溺れた、ガァー (ふふふ……)」

ルーファス完全の飛んでいた。帰還するのは大変かもしれない。

こんなブルーになるような歌を口ずさむ廃人を見かねてか、悪魔はため息混じりにこう言った。

「しよーがないなあ。今回は特別に何もしないで還ってあげるよ (こんなひとから魂なんてもらったら寝覚めが悪くてしよーがない

もん）」

この言葉を聞いたルーファスに生命の息吹が戻り、宙をジャンプして喜びを表現した。

「ほ、本当、ありがとう！！（あゝ、よかった）」

「じゃあ、アタシ還るね（さっさと別の人に憑かなきゃ）」

心から安堵するルーファスに別れを告げて還ろうとする悪魔だったが……。

「あれっ?」

悪魔が素っ頓狂な声を上げた。思わずルーファスの動きも止まる。

まさか……!?

「どうしたの? 早く還りなよ」

「えいつ! ……あれえ?(おかしいなあ?)」

「……どうしたの?(嫌な予感がするんですけど)」

それは予感では済まなかった。

仔悪魔はさらっと言い放った。

「還れないみたい」

「……………」

ルーファスの思考一時停止。ルーファス再起動。

「……今なんて言ったの？」

「うーん、原因はわからないんだけど、あなたの身体から離れられないみたい（こんなこと初めてだからなあ？）」

ルーファスフリーズ。だがすぐに解凍、そして爆発。

「な、なんだって！！ 何っ還れない！！ どういうこと！！」

脳内で処理できない事柄はパニック現象を引き起こす。ルーファスはそれが特にわかりやすく外に出た。

「さっき間違ってアタシを召喚したって言ったでしょ？ きつとそれが原因だよ（……たぶんだけど）」

「ど、どどど、どうすればいいの？（あゝ、カミサマ私はなんて不幸なんでしょうかあゝ……ぐすん）」

「アナタとの契約内容は、アナタの魂が尽きるまで願望を叶えるというものだから……きつと、アナタが死ぬまで離れられないのかな？（……イマイチ自信ないけどね）」

「ま、マジで？（泣）」

絶望の淵へと再び追い詰められたルーファスは、独りになろうと部屋の隅に行くが、彼の影は当然彼とともに移動する。

部屋の隅でルーファスは体育座りをして『の』の字を涙で床に書く。そんな彼には解決の糸口はきつと見つからない。

また歌を歌って現実逃避を始めたルーファスの影に変化が起きた。な、なんと影の中からピンク色をしたツインテールの髪の毛らしきものがニョキッと生えびよんぴよんと揺れ動き、しばらくして黒い物体が這い出して来た。

ルーファスは目を見張った。

「!?!? (マジで!?!?)」

ルーファスが今目の前にしているものは、ツインテールのピンクの髪の毛に黒い生地フリフリレースのついたゴスロリ服、靴の底は高い。

「っもう、ショ気ててもなんにもならないでしょ? (涙いっぱい流して、子供じゃないんだから)」

あどけなさの残る13〜15歳くらいの美少女の足が、短めのスカートからスラリと伸び、仁王立ちを作っている。これはルーファスにとって新たなショックだった。

「君が悪魔? (人形みたいに可愛いけど……どう見てもお子様)」

今ルーファスの前に立っているゴスロリ少女が悪魔の真の姿だった。

「だから、アタシはちょ〜可愛い仔悪魔のシエリル・B・B・アズラエル。愛称はビビ、歳は今年で426歳、えつと好きな食べ物人間の魂とチョコも好きだよ、甘いやつね、それから、それから、(え〜つと……)」

こんな悪魔を目の前にしてルーファスの口は思わずツルつと滑った。

「こんな子供に魂取られるなんて、ヤダよぉ〜 (大泣)」

「子供とは失礼ねえ、これでもアナタより何十倍も生きてるだから（アタシから見ればアナタの方がよっぽど子供よ）」

ちなみにこの悪魔はルーファスの約25倍生きている。

「私より長生きしてるなら、還る方法探してよ」

「だから、アナタの魂を全部貰うまで還れないって（たぶんただとさあ）」

悪魔はそれを実際にわかりやすく見せるためにルーファスから遠ざかろうと離れたが、5メートル（約6メートル）のところで足は動いているのに前に進まないという現象に襲われた。

「わかった？ これ以上は進めないの（……本当は無理すればもうちょっと行けそうだけど、アタシの存在が危うくなりそう）」

ルーファスはこくこくと頷いたあと、悪魔から離れるようにして急に動いた。

「あうっ！（いきなり動かないでよ!）」

悪魔の身体はルーファスの動きに合わせて引っ張られた。

「……本当だ」

「『本当だ』じゃないでしょ、いきなり動かないでよ、ビックリするでしょ?」

「ごめん……でも、困った（ホントどうすればいいの?）」

まだまだ、未熟な魔導士ルーファスには本当にどうすればいいのかわからなかった。しかし、方法がないわけではない。

「（この子を消滅させれば……でも……）」

この悪魔を消滅させればルーファスは無事解放されるが、ルーファスにはできなかった。消滅イコールそれは相手を殺すということになる、もともとルーファスはそんなことのできる人間ではなかったし、それにこの悪魔の見た目が人間と全く同じでしかも少女だったことが余計にルーファスに戸惑いを覚えさせた。

しかし、相手は真正正銘の悪魔だった。

「魂全部くれればきつと嫌でもアタシはアナタから離れることになると思うから、よろしくね」

少女は本当の悪魔の笑みを浮かべた。その笑顔は激マブだが、騙されてはいけない。相手はルーファスの魂を取ろうとしているのだ。

肩を落とし暗い影を落とすルーファスの肩をポンと軽く叩く悪魔。

「外に出ると疲れるみたいだから影の中に戻るね」

「あ、うん（どうしよ〜、どうしよ〜、どうしよ〜）」

『どうしよ〜』で頭のいっぱいいるルーファスは気のない返事しか返せなかった。今の彼はそーとー追い詰められている。

影の中から声がした。

「あ、そうだ、アナタの名前聞いてなかった」

「え、私、私の名前はルーファス」

「ルーファス、名前は結構カッコイイね。じゃあ？ルーちゃん？ね、

「アタシのことは『ビ』って呼んで」

「……あ、うん」

そんなこんなで、この日からルーちゃん&ビビの？被う？か？奪う？かの奇妙な共同生活が始まってしまったのだった。

第1話「桃髪の仔悪魔（2）」

自称ちよ〜可愛い仔悪魔ビビはルーファスの願望を叶える代わりに、それに見合ったルーファスの魂の一部を貰い、それを生きる糧とする。そして、ルーファスの魂を全部使い果たせば、ビビはルーファスの影から解放される……っばい。ビビ自身も確証はないが、たぶん離れられるに違いない。

今のビビはルーファスの中途半端な召喚術のために、ルーファスの影から長い間離れる事ができなくなってしまっていた。影から離れると急激に体力を消耗してしまううえに5メートル（約6メートル）以上離れることができない。

だからビビはルーファスの影を拠り所としていて、そこから人間界で自分の存在を維持する為、全てのモノが持っていると言われる生命の源『マナ』を貰っている。

マナの語源はこの世界の古代語で、『名誉』や『威厳』といった意味合いの言葉である。

今この世界でルーファスの影を拠り所としているビビは、その為に影から出ることやルーファスの身体を長時間離れることに制限ができてしまっているのだ。

そんなわけで二人は必然的にいつも一緒にいることになる。

自宅のソファーらしきものに腰を掛けるルーファス。？らしい？というのはこの部屋が散らかり過ぎていて、この物体が本当にソファーかわからないからだ。まさに足の踏み場が無いというのは、こ

ういう光景のことをいうのだろう。

へっばこ魔導士ルーファスの名を大人から子供、お隣さんの猫まで（どこの猫だよ）知らぬ者はこの国にはいない。そんな彼のへっばこぶりと部屋が汚いのはきつと何か関係がある。つまりズボラ。

ソファアに腰掛けるルーファスは、昨日から今日の今までの昼間ちよい過ぎまで考えていたことを深く、深く考える。そして、深く考えすぎて、眠くなって寝る。

ガクつと首が動きパツと目を覚ます。

「（……寝るところだった）」

寝そうになってどうする。深く考えるほどの難題があるのではないのか？

ルーファスは昨日から悪魔ビビを抜う方法を一生懸命考えたのだが、ビビの存在を消滅させる方法は浮かんでもそれ以外の方法は全く浮かばなかった。

悪魔の見た目は普通の少女と何ら変わらない。そんなビビをルーファスは消滅させることはできなかった。

再び深く深く考えるルーファス。そして、また深く考えすぎて深い眠りが……。じつはこのソファア、すっげえふかふかしていて眠りを誘う魔のソファアだった。実際ルーファスはこのソファアで寝てしまうことが多い。

ガクつとルーファスの首が曲がり、すやすやと静かな寝息が聞こ

えてきた。ルーファスは完全にソファアの魔力に負けたのだ。

そんな至福の時を味わっているルーファスの安眠妨害をする者がいた。この家の奇妙な同居人だ。

「ねえルーちゃんお腹空いたよぉ」

子供のようにポカスカと両手でルーファスを殴り喚く仔悪魔ビビ。彼女は今すっごくお腹が空いていた。

お腹が空いたというのは人間が食するような食物を欲しているのではなくて、魂を欲しているのだ。

ビビは人間が食べるような食べ物を食べて栄養を摂取することもあるが、それ以外に魔力の源として人間の魂を必要としている。人間の魂を喰らうことによりビビは、強力な魔力や若さを保つことができるのだ。

「お腹空いたよぉ〜（もう死ぬう〜）」

近くで喚かれたルーファスは眠たそうに目をこすりながら返事をした。

「もうぉ、ちょっとは寝かしてよ（昨日から全然寝てないんだから）」

昨晩はビビを抜く方法を考えて過ぎて眠れなかったのではない。ビビのことで眠れなかったのは変わらないが、その理由はしょーもないものだった。

「別に寝なくてもいいじゃん、アタシなんて寝なくても平気だよ！」
「ビビは寝なくても平気かもしれないけど、純人間の私は寝ないと持たないの（……昨日から、ずーっと元気なままだよな、この子は……）」

不眠の理由、それはビビの遊び相手として一晩中付き合わされたからだ。この悪魔ビビは寝なくても平気らしい。

「お腹が空いたあ、お腹が空いたあ、お腹が空いたあ〜！！」

「……見た目と一緒に性格も子供」

「だから、子供じゃないって言ってるでしょう！ これでも426歳なんだから」

ビビは頬つぺたを膨らませて顔を真っ赤にした この仕草は子供だ。いくら426歳だろうが、ビビは子供としか言いようがなかった。

「頬つぺたを膨らませる仕草は十分子供だと思っけどな（どっからどう見ても、可愛い女の子だもんな）」

「子供じゃないもん（友達とかにも子供扱いされるけど、立派な悪魔なんだから）」

ビビは悪魔友達からも子供扱いされているらしい。

「そうやって、拗ねてる感じも子供っぽいよ」

「まあ、うるさいなあー！」

「そうやって、怒るのも子供っぽい」

「しっさいー！」

ルーファスはちっちゃくて可愛い女の子をイジめるのが以外に好

きだったりした。断っておくがルーファスはロリコンではないので
ご注意を。

ビビのお腹がぐうぐうと鳴いた。それにつられてかルーファスのお
腹もぐうぐうと鳴いた。

同時にお腹を擦る二人。

「お腹空いたよぉ」

「……うん、たしかにお腹が空いたね（どうしようかな？）」

「この際魂じゃなくてもいいから、何か食べ物調達しに行こうよお

（本当は魂の方がエネルギーになるけど……）」

「えっと、じゃあ市場にでも行こうか？」

「大賛成！」

笑顔を浮かべ両手をうれしそうにあげるビビの無邪気な姿は、人
間の魂を喰らう悪魔になんて絶対見えなかった。ここにいるのはあ
どけなさの残る？426歳？の少女だ（笑）。

悪魔がこんな少女だからこそ、ルーファスは余計に消滅させるこ
とはできなかった。

ルーファス宅からバザールと呼ばれる市場までは少し離れている
ので、そこに行く為に乗り合い馬車を使用する。

この世界には空を飛ぶという魔法もないこともないが、その魔法
は高度で体力などのエネルギーを多く使用する為に移動手段として
は実用的ではない。

狭い馬車に揺られるルーファスの横にはビビがいる。つまり、言うまでもないが影から出ているということ。

ビビの見た目は少し目立つ服装をしているものの、そこらにいる女の子となんら変わりもない。

馬車の中には数人の客が乗っているが、ビビのことは少しは変わった服を着ているとか可愛い女の子だなと思うかもしれないが、それ以上は気にも止めなかった。ある人物がこの馬車に乗り合わせるまでは……。

この乗り合い馬車は決まった停車場所で客を乗り入れるが、道ばたで乗り込むことも可能だった。

馬車が緩やかに止まった。ここは停車場所ではない。

空色の生地白いレースをあしらったドレスを着た美しい女性が、さしていた日傘を閉じて車内に乗り込んで来た。生つ粋なお嬢様のようだ。

馬車の出入り口には乗務員がいて、乗ったらすぐに行き先をその人に言つて料金を前払いする仕組みになっている。

「……魔導学院まで」

ゆつくりとした口調で、透き通るような、そこに無いような声色だった。それに対して乗務員が料金を言う。決まった停車場所以外で乗った場合、料金は客が乗り合わせた前の停車場所から、客が言った停車場所までになっている。

「16ラウルです（いつも、ここで乗るんだよなこの子）」

空色のドレスを着た女性は、硬貨を乗務員の手のひらの上に落とすようにして料金を支払った。

馬車はすでに再び走り出しており、ガタガタと揺れている。馬車の中には席が設けられていて、そこに座りきれない場合は立って乗る。

席はまだ空いている。が空色のドレスの女性はガタガタと揺れる車内の中を立っていた。しかも、ただ立っているだけではなかった。この女性はルーファスのことをずうーっと凝視している。

無表情の顔がルーファスのことをずうーっと見ている。ルーファスもその人物のことをずうーっと見ている。二人の間には変な空気が流れている。そして、空色のドレスを着た人物が口をゆっくりと開いた。

「……ひさしぶり、へっぼこくん（ふにふに）」

この言葉を発した一瞬だけ、冷めたような目をしての口元が少し歪んだ。ルーファスを少しバカにしているような態度だった。そして、すぐに無表情に戻る。

ひさしぶりと言われたルーファスは当然相手のことを知っている。この人物の名前はクリスチャン・ローゼンクロイツ、ルーファスが魔導学院に通っていたところからの知り合いで、今も一緒のクラスが魔導学院に通う同級生で、しかもクラスが一緒だったりする。そして、もうひとつ、彼女は彼女にあらず、彼だった。

「こつちこそひさしぶり（今日学校休みなのになんで学院に行くんだろ？）」

「なんで学校に行くのか聞きたい顔をしているよ。実はね、出席日数が足らなくて進級できないらしい……ちょっと自分に苦笑（ふ）」

ローゼンクロイツは口を手を当て苦笑するとすぐに無表情な顔に戻った。そして機械のような正確な歩調で歩き、ルーファスの横の席に座った。

ルーファスの右手にはビビが座っていて、彼女はルーファスごしに覗き込むような姿勢をとってローゼンクロイツを見たあとルーファスに聞いた。

「知り合いなの？（電波系って感じがするな）、ちょっと」

「小さいころからの知り合いで、今も同じ学校に通ってる（クラスじゃあんまり見かけないけど）」

ローゼンクロイツは学校には来てはいるが授業には出ていない。そのため授業の出席日数が足らなくて進級が危うい。だが、彼は勉強や魔法を使う能力などは生徒の中で1、2を争う程で、授業に出ないで魔法の研究を独自にやっていて功績も納めている。ルーファスとはそこが違う。

ローゼンクロイツは突然ぼそりと口を開いた。彼の思考は天才肌で少し常人と違っている。そして、勘が鋭い。

「そつだ、忘れてた（ふにゃ）」

「何を？（……ローゼンクロイツの思いつき発言は、いつも何かが

起こる前触れ)」

嫌な顔をするルーファスの心臓はバクバクだ。彼の嫌な予感ほど当たる。それは自分でも自覚している。

「嫌な顔、しない、しない、そんな顔していると嫌なことが本当に起こるよ（ふにふに）」

「だって、君の思いつき発言は何かが起こる前触れでしょ（しかも百発百通だからね）」

「そうなの！ それは知らなかった……（ふにい〜）」

「自覚なかったの？」

「……ウソ（ふっ）」

二人の会話をビビは珍しそうに見ていた。特にローゼンクロイツのことを。

「（不思議ちゃんオーラが出てるよ）あのさ、そっちの人の名前聞いてないんだけど？」

「人の名前を聞くときは、自分から名乗るもの……無礼者^{ふいっ}」

嫌な顔を一瞬してすぐに無表情に戻る。どうやらこれは彼の特性らしい。

「ねえルーファス、この人性格悪いでしょ？（絶対そう!）」

「そ、それはノーコメント（ほ、本当はすごく悪性だよ）」

苦笑いを浮かべるルーファスのことをキツと睨んですぐに無表情に戻るローゼンクロイツは、再び思い出す。

「そつだ、それ悪魔（ふあ〜）」

狭い馬車の中、しゃべり声は十分響き渡る。一同沈黙。

ややあって、同乗していたおじさんが声を荒げた。

「悪魔だって!」

これを合図にビビ及びルーファス&ローゼンクロイツ以外の乗客3名と乗務員がビビとできるだけ距離を空けた。

この国では魔法は普段の生活でも珍しいものではない。だが、悪魔となれば話は別だ。

恐れおののく人たちを見てビビは顔を膨らませながら一歩前へ出た。

「なによ、悪魔だからどうしたっていうのよ!」

怒鳴り声に余計に震え上がる人々。こんな状況を打開すべく、ルーファスが立ち上がった。

「え、あのですね、みなさん、ほら、見てください。ただの可愛い人間の女の子ですよ。どこをどう見たら悪魔に見えるっていうんですか?」

こんな説得ではうまくいかない。若い女の人が鋭い指摘をしてきた。

「だって、その子自分で『悪魔だから』って……(そう言ったわよ絶対!)」

ビビはもう一歩前へ出る。

「アタシは正真正銘のちょく可愛い悪魔よ、それが何か？」

ビビの身体が急に中に浮いた。ルーファスに抱きかかえられたのだ。そして、馬車の外へ飛び出す。

何事もなかったように走り去っていく馬車を見送りながらルーファスはビビを地面に下ろした。

「普通の人は悪魔って聞いたら怖がるんだから、少しは隠すとかしてよ」

「別にいいじゃん、怖がらせておけば」

「……私とビビは今や運命共同体なんだから私に迷惑かかるでしょ？」

「私だって迷惑してるんだから。ルーちゃんに呼び出されて……もう、いいよ！（私がルーちゃんに迷惑かけて何が悪いっていうの？）」

顔を膨らませながらビビはズカズカと歩いて行ってしまった。だが、少し行ったところから一向に前へ進まない。

動作的には歩いている動きをしているが、まるでパントマイムのように前には進んでいない。これ以上はルーファスと離れられないのだ。

くるっと振り返り、顔を赤らめて恥ずかしそうにルーファスのもとへ戻ってきたビビは言った。

「もう少し、一緒にいてあげてもいいかな……」

ルーファスはやれやれと両手を軽く上げてため息を付いた。

「はあ、子供だよねえ、ホント」

「だから、子供じゃないって言ってるでしょ〜!!」

ポカスカと殴られるルーファス。彼とビビの微妙な関係はまだまだ続きそうだ。

第1話「桃髪の仔悪魔」(3)

影から出てきたビビはどこにでもいる女の子と変わらない。そして、今はそこらにいそうな恋人だった。

「ねえ、ルーちゃんあれ食べたい」

ビビの指差した先にはくだものたくさん置かれた屋台がある。

ここバザールには数多くの食料品が取り揃えられていて、魚などは生簞「イケス」に入れられ新鮮なまま売られている。

ルーファスはビビの伸びた指の先を目で追って、そこにあるものを見た。

そこにはくだもの屋さんがあるが、ビビの指はもつと的確に示されていて、それを見たルーファスの表情は曇り空のようになってしまった。

「……ちよつと高いかな（いち、にい、さん、よんつて）」

指のさされたくだものは手のひらに納まるくらいのピンク色をした丸い柑橘系の食べもので、名前をピンクボムというが、正式名称は別にあり『ラアマレ・ア・カピス』といい、意味は古代語で『神々のおやつ』という。

ビビはピンクボムを見てはルーファスの顔を見るといふ行動を何度も繰り返している。

「ラアマレ・ア・カピス食べたいなあ〜（口に入れた時の脳みそがスパークしそうな感じがたまらないんだよねえ）」
「でも、ピンクボムって高いんだけど」

ピンクボムの前にごじんまりちよこんと置いてある値札には、ごじんまりしてない値段が書いてある。1000ラウル。

「1000ラウルくらいいいじゃん」

「1000ラウルもあつたら、1ラウルチョコが1000個も買えちゃうよ（うめえぼうだと500個だよ）」

「じゃあ、1ラウルチョコ1000個でもいいよ（アタシチョコ好きだし）」

「はいはい、別の見に行くよあ〜（チョコに1000ラウルも出せないよ）」

ルーファスはビビの腕をガシツと掴むと引きずりながら別の場所へ移動した。

このあとバザール内を見回して結構な量の買い物をしたのち、二人はまた乗合馬車に乗って家路についた。

帰りは何事もなく、一安心で家についたルーファスは安堵のため息をもらした。

「ふう〜、やっぱり家が一番落ち着くなあ〜」

「（年寄りくさいセリフ）」

注意しておくがルーファスは数日前に17歳になったばかりだ。

「台所に行くついでに東方のおみやげでもらった緑茶でも飲もうか

な」

「（緑茶ってしびい紅茶のハトコみたいなのでしょ、やっぱり年寄りい〜）」

ちよつと軽蔑の眼差しで見るビビのことになど全く気づかず、ルーファスは買い物荷物を持って台所に行ってしまった。ビビは当然ながらそのあとをめんどくさそうについて行く。

台所に着くとルーファスは買ってきた食べ物などをしまったりし始めた。その間ビビは食卓の椅子に腰掛けながら足をぶらぶらさせてひまそうに待っている。すると、そんなビビの目の前のテーブルにバンツと大きな魚が置かれた。

「この魚がどうかしたの？」

目を丸くしているビビの前に置かれた魚は、ルーファスが値切りに値切って買った大きめの生きた新鮮な魚だ。

魚屋の若主人曰く、その二人の買い物客が、彼女に尻を敷かれているカップルのようであったと語っている。

丸々生きた大きな魚をビビの前に出したのはルーファス的には理由がちゃんとある。

「この魚の魂食べたらしはお腹の足しになるでしょ？（我ながらいい考えだ）」

「まあ、魚の魂だつて食べれないことないけど（普通はやらないよ）」

のちにルーファスは人間の生贄の変わりに今回と同じく魚、それ

もマグロの刺身を使用したことにより大変なことを起こすことになるのだが、それはまだまだ先のお話。

仕方なくビビは魚の魂を喰らうことにした。

ビビがゆっくりと目を瞑ると、アウトサイドとこの世界では呼ばれている、今二人がいる空間とは次元の異なった空間に保存してあった大きな鎌を取り出し構えた。その光景はマジシャンがどこからともなく物体を取り出すような光景に似ていた。

鎌を構えたビビの目がカツと見開かれ大鎌が魚に振り下ろされた。鎌は魚を通り抜け、テーパーを通り抜け、何一つ傷を付けていない。鎌は物体を通過してしまったのだ。

少しして魚から白い煙のような物が立ち上り、それはビビの口の中にすーっと吸い込まれていった。それと同時にビビのお腹がぐーっと鳴いた。

「お腹空いた」

魚程度の魂ではビビのお腹を満たすことはできないということなのだろう。

「でも少しは足しになったでしょ？」

「少しはね。でもまだまだ足りないよ」

「あとは普通の食べ物で我慢してもらうしかないね」

「ええ〜っ！」

「しょうがないでしょ？」

「ダメ！（でも、このままじゃ……）」

ダメとは言ったものの、このままではビビは衰弱していつてしま
うに違い無い、早く手を打たなくては……。

食事を終え、ルーファスはビビを連れてある場所に向かった。

馬車に揺られて数十分、噴水のある円形の広場を抜けたその先に
その建物はある　クラウス魔導学院、この学院はこのアステア王
国一の規模を誇る魔法学校である。

ここでルーファスは魔導学院の教師であるカーシャのもとを訪れ
ることにした。

直射日光を嫌うカーシャは学院の地下に自室を設け、ロウソクだ
けの薄暗い明かりの中で魔術の研究をしていた。

彼女は融通の利く合理的で利己主義な美人教師として学園内で名
が通っており、何か困ったこと、主に成績などで普通ならどうしよ
うもないような問題を抱えた生徒たちが彼女のもとによく訪れる。

ルーファスとビビはその薄暗い部屋にいた。

「あのカーシャ、頼みごとがあつて来たんだけど」

ルーファスはカーシャのことを呼び捨てで呼んでいる。その理由
はこの二人がただの生徒と教師に関係ではないということ、ただし、
恋人同士とかいった関係でもない。二人はある意味腐れ縁といった
関係だった。

薄暗い影の中にロウソクの光がぼわあ〜と灯り、人の顔が現れた。その顔は白く美しかった。

「わっ！！」

ルーファス&ビビは同時に驚いた。ルーファス的には突然のカーシャの登場に驚き、ビビ的には幽霊かと思って驚いた。

冷たい風がすーっと部屋の中に吹いた。しかし、ロウソクは全く揺れていない。風が吹いたのはルーファスとビビの背中だけ。

「頼みごととはなんだ？（知らん女が一緒か……ま、まさかへっぽこ魔導士ルーファスに彼女できる！？　なんてことはないな……ふふ）」

「脅かさないでよ！　毎回そーゆー現れ方してえー」

「それよりも用件を言え、妾も暇じゃない（給料が懸かっているからな……切実だ）」

「え〜と、こちらにいるのがビビ」

ルーファスはおすすめメニューを紹介する店員さんみたいに手のひらを返してビビに手を向けた。

「えっと、アタシの名前はシェリル・B・B・アズラエル、愛性はビビ、よろしくね」

可愛らしくあいさつをしたビビのことをじーっと見つめたカーシヤはぼそりと呟いた。

「悪魔だな」

「わっかるう〜、アタシはこれでも魔界ではちょ〜可愛い仔悪魔で

「ちょっとは名前が知られているんだからね」

「わかるもなにもファウストが職員室で話していたのを聞いた（ルーファスの人生は、やはり呪われている。……論文にまとめるとおもしろいかもな……へっぽこ、ふふ）」

いきなりルーファスがカーシャに頭を下げた。

「お願い、どうかして！」

そんなルーファスにカーシャは、きつぱりさつぱりあっさり答えた。

「駄目だ。これは本来ルーファスの追試の一貫なので手伝うことはできない（しかも、ファウストのだからな）」

ファウストとカーシャの仲の悪さは学園内でも有名な話で、カーシャがルーファスの追試に手を貸したくない理由の9割がそこにある。

だが、カーシャは咳払いをひとつしたあと話を続けた。

「コホン、だがな、場合によっては手伝ってあげないこともない（ふふ……ふふふ）」

心の中で不信に笑うカーシャ。善からぬことを考えているのは明々白々、お天道様「テントサマ」も知っている。

「ごくんとルーファスが唾を飲む音が聴こえた。この時カーシャの瞳がキラリーン！ と光ったような気がする。」

「場合つてどんな場合？（嫌な予感はあるけど）」

何度も言っているような気がするが、ルーファスの嫌な予感は大抵当たる。

「ふふふ、聞いて驚け！ パラケルスス先生のホムンクルスを2体盗んで来い！！」

「はあ〜っ！！（無理）」

ホムンクルスというのは簡単にいうと人間の形をしている入れ物のことで、それをカーシャは盗んで来いと普通に言つてのけたのだ。

「盗んで来いと言つたら盗んで来い。そのホムンクルスを実験で使いたいパラケルススが貸してくれないのだ（あのケチじじいが！）」

とカーシャは愚痴をこぼす。がルーファスは大反対だ。

「駄目、駄目、絶対駄目！！（あんな良い先生の物なんて盗めないよ）」

パラケルスス先生と言えば、優しくいつも笑顔を絶やさない先生で、ルーファスも普段から大変お世話になっている。

「ホムンクルスさえ手に入ればビビをルーファスに影ごとそのホムンクルスに移すことができる。そうすれば、ビビは身体を手に入れ今よりは自由に行動ができるようになると思うが？（ふふ、妾の研究も進んで一石二鳥）」

深く悩み苦悩するルーファスだったが、ホムンクルス強奪の話は

カーシャとビビの間で勝手に進められ、ビビは絶対にホムンクルスを盗んで来るとカーシャに約束していた。

「カーシャ、アタシ絶対ホムンクルス盗んでくるからね！」

「うむ、頼もしい娘だ」

ルーファスしばし沈黙。そして、

「なんで、勝手に話進んでるの？」

二人の女性が同時にルーファスのことを睨んだ。

「いいじゃん別にい」

「ルーファスお前には選択の余地はない。選択権があるのはこのビビだ」

「……………（なんか、不公平だ）」

しかし、結局有無を言わせぬままビビはルーファスを引っ張って強引にホムンクルスを盗みに行ってしまった。

今日は休校日で教職員の大半はいつでもどおり学院に来ているが、生徒は勉強や研究熱心な学生しか来ていないので、学院内にいる人数は普段の10分の1にも満たない。そのためルーファスは難なくパラケルス先生の研究室の前まで来れた。

ビビは今ルーファスの影に戻っている。この方が行動しやすいからだ。

ドアの前で腕組みをするルーファス。

「カギどうやって開けようか？」

カーシャちゃん情報によるとパラケルスス先生は今日は学校に来ていないらしい。だが、研究室にはカギがかかっている。

取り合えず、ドアに手をかけて引いてみる、押してみる、ノックしてみる。

「開けてくださ〜い」

「ルーちゃんばかでしょ？」

「試しにやってみただけだよ！ ……でもどうやって開けようか？」

「魔法でドツカ〜ンってわけにはいかないの？」

「このドアは特殊合金でできていて、私の程度の魔導士の魔法は全部無効にされる」

「役立たず〜」

突然ルーファスの後ろで誰かが呟いた。

「ボクも思うよ。ルーファス役立たず（ふにふに）」

バツとルーファスが振り返った。その目線の先にいたのは空色のドレスを着た変人 クリスチャン・ローゼンクロイツだった。

「なんで、ここにいるのお〜！？（あわわ〜！？）」

ルーファス取り乱す。今から悪いことしようとしていたので、余計に取り乱す。

「すごいよルーファス、今からボクが君に言おうとしたことを当てるんなんて!?(ふあ〜)」

それは違つと思つ。

「そうじゃなくって……」

「……ウソ。冗談に決まってるでしょ(ふっ)。出席日数が足りなくて呼び出されたって言ったろ? 記憶力ないね君^{ふう}」

ワザとだつたらしい。つまりこいつの性格はそれなりに悪いといふことだ。

「そのくらい覚えてるよ!(絶対バカにされてる)」

「……でも、ルーファス。なんで君がここにいるんだい? しかも

そのドア開けようとしてたみたいだけど(ふーっ!)」

「ドキっ!(見られてた!?)」

「……なんてね。どうしてかはカーシャ先生に聞いてるよ。ボクも今カーシャ先生の所に行つて来て、マスタードラゴンの鱗を取つて来いって言われたから(ふにふに)」

クリスチャン・ローゼンクロイツは人をからかうのが好きらしい。

「そんなに私のことからかかって楽しい?」

「……それはどうか?(ふっ)」

「……………(遊ばれてる)」

「そうだ、そのドア開けてあげようか?(ふあ〜)」

「ホントに!?!」

「もちろん、ボクとルーファスの仲じゃないか……? 恩を売って? あげるよ(ふにふに)」

ローゼンクロイツの口もが少し歪みすぐに普段の無表情に戻った。

『恩を売ってあげる』という言葉が多少引つかかったが、ドアを開けてもらえるならとルーファスはローゼンクロイツに頭を下げた。

「お願い！」

ローゼンクロイツはルーファスを押し退けドアの前に立った。このドアはそんなじゃそこらの魔法では開かない。

意識を集中しながら立つローゼンクロイツの背中をルーファスが息を呑みながら見守る。

ローゼンクロイツが動いた。強力魔法が繰り出されるのか！！

ゴンツッ！ ローゼンクロイツの蹴りがドアにヒットして特殊合金のドアは大きな音を立てながら外れ倒れた。

「ほら、開いたよ（ふにふに）」

『ほら』じゃないだろ！ と突っ込みを入れたくなるが、その前にローゼンクロイツはさっさと行こうとしている。

「……じゃ（ふにい〜）」

ローゼンクロイツは片手を上げると音も立てずに歩き去ってしまった。

呆然と立ち尽くすルーファスにビビが声をかける。

「ああいうのってアリなの？」

「オオオ？ アリなんじゃない？」

第1話「桃髪の仔悪魔（完）」

部屋の中は実験機具などが整理整頓され、一目でどこになにがあるのかが確認できるようになっていた。パラケルスス先生の人柄が人目でわかるようになっていた。

ホムンクルスは部屋の中にくつもあるガラス管の中にいた。

ガラス管の中は液体のような物で満たされ、下から小さな気泡が上へ上がっている。そして、時折大きな泡がホムンクルスの口から吐き出される。

これを見たルーファスは困り果てた。

「そうだった、この装置ごと運ばないといけないんだ……」

「1つでも大変な物を二つもどうやって運ぶ？ しかもばれないように……？」

困った表情をしているルーファスの影から、ニョキッと出て来たビビが、ルーファスの顔を覗き込み自分を指差した。

「アタシがいるじゃない？」

「どーゆーこと？」

「ルーちゃんの魂さえ少し食べさせてくれれば、カーシャの部屋まで装置ごと瞬間移動させてあげるよ」

「……………（困った）」

「でも、ルーちゃんの寿命が3ヶ月ほど減るけどね」

満面の笑みで明るく言われても困る。

「3ヶ月も減るの？ 1日とかに負けられないの？」

「無理だよそんなのお」

支払う魂と願ひ事の質の大きさは比例しているので、負けるとい
うのは無理な話だ。

半人前の魔導士であるルーファスにこの装置をカーシャの部屋に
運ぶ術はない。ローゼンクロイツももうここにはいない。

ビビはルーファスの服の袖をぐいぐい引っ張りながら、ルーファ
スの瞳を仔猫のような瞳で見つめている。自称ちょく可愛いと言っ
ているほどのことはある 激マブ。

ルーファスはしぶしぶビビの申し出を受けることにした。激マブ
に負けたわけではない、ルーファスには本当に成す術がなかったの
だ。

「よろしくお願いします（3ヶ月か……）」

「オーケー」

ビビは別空間に保管してあった大鎌を取り出し、その切っ先を天
高く構えた。

「痛くないよね？」

「さあ、アタシ切られたことないし？」

「えっ、ヤダよ痛いのは!？」

「ウソだよ。痛くないから心配しないで……」

台図なしでいきなりビビはルーファスに大鎌を振りおろした！

ルーファスは殺されると思い目をぎゅっとつぶったが 死ななかつた。恐る恐る目を開けると、そこには何かを飲み込むような仕草をしているビビがいた。

「ごくん。あゝ、おいしいいゝ（やっぱり魚なんかより、人間の魂だよね〜）」

ごくんと何かを呑み込んだ様子のビビはお腹を摩りながら満足そうな顔をした。ビビは大鎌によってルーファスの魂の一部だけを切り取り補食したのだ。

「え？ 今のでおしまい？（呆気なかったな）」
「うん」

ルーファスは実感が沸かなかつた。本当に自分の寿命が3ヶ月減つたのだろうか？

魂を喰らい魔力を得たビビの足元の下から目に見えないオーラが発せられ、ゴスロリ服が揺ら揺らとゆらめく。

魔力の解放。ルーファスは正直恐怖さえ覚えた。

「（な、なんてマナなんだ……こ、これで3ヶ月？）」
「いくよお〜！」

全てを呑み込んだ。ビビから発せられた影が、闇がこの部屋にあるものを全てを呑み込んだ。

グオオオツ！！ 耳元で鳴り響く風の流れるような轟音。

気づくとそこはすでに薄暗いカーシャの研究室だった。魔力を得たビビは瞬時にホムンクルスと装置、そして、自分たちまでも一瞬にしてカーシャの研究室に運んだ。

灯ったロウソクの中からカーシャが浮き出るように現れた。

「よくやった。すぐにビビをホムンクルスに移す儀式を執り行っぞ」
ルーファスとカーシャは直ぐさまビビをホムンクルスに移す儀式の準備をした。

カーシャの研究室は薄暗くてよく分からないが実際は異様なまでに広い、それはこの部屋でいろいろな儀式や実験をするためだ。

「ルーファス、本棚から魂移しの儀の描かれた魔導書を取ってくれ」
「オツケー」

部屋の中を忙しく動き回るルーファスをあごで使うカーシャは、こちらはこちらで魔方陣を描くので手一杯だ。何もすることがないビビはルーファスの影の中で邪魔にならないように静かにしている。

そして、その広い部屋一杯に儀式の準備をして、ようやく準備は整った。

魔方陣の真ん中にルーファスとビビが立つ。カーシャはロウソクを付けながら二人の周りを円を描くように歩き呪文を唱える。が、しかし、カーシャが思わぬビックリ発言を突然した。

「違う儀式の呪文だ（準備の段階からなにか変だとは思っていたんだ）」

呟いた。聞こえるか聞こえないほどの声で呟いた。だが、ルーファスとビビの耳にはしっかりと届いていた。

「なんだって!?!」

「うっそ〜!?!」

この儀式に使う呪文の書かれた魔導書は、儀式を始める前にカーシャが本棚の中からルーファスに頼んで取ってもらっただった。

儀式は見事失敗した。そして、辺に爆風が吹き荒れ、業火がルーファスたちの周りを包み込んだ。

「もしかして私のせいなの?（うそでしょ!?!）」

もしかしてではなく、ルーファスのせいである。最後まで気づかなかったカーシャにも責任はあるような気もするが、弱い立場に罪が擦り付けられる。

「ルーちゃんどうにかしてよ!?!」

「どうにかって、カーシャどうにか……」

慌てふためくルーファスはカーシャに助けを求めようと彼女のいた筈の方向を振り向いた筈だった。そう筈だった。

「マジでえ〜!?!」

ルーファス叫ぶ。

ルーファスは唾然とした。カーシャの姿はそこには無かった。いたのはうさぎしゃんのぬいぐるみと書き置きだった。書き置きにはこう書かれていた。

すまん、暑いのは苦手だ。

ルーファス的大ショック！

カーシャは一目散に逃げたのだ。騒ぎに巻き込まれるのはゴメンということなのか？

「ルーちゃん、あのどこ行っただの？もしかして逃げたの！？」
もう、サイテー！」

「たぶん、逃げたのかなあ、よくあることだから……あはは（笑えないよ、毎回毎回いざってとき逃げて……）」

火に手は部屋中に広がって行く。それに比例してルーファスとビビは部屋の隅へと追いやられて行く。しかも、ついてないことに部屋の入り口からだいたい離れてしまっている。

ルーファスの額から冷たい汗が流れ出る。

ビビは火に向かって大鎌をぶんぶんと振って、火を追い払おうとするが、それは無意味としか言い様がない。

いつになく真剣な表情なルーファスの手から吹雪が出た。

「これでどうだ……！……お願いだから消えて」

ルーファスの作り出した吹雪は猛吹雪だった。しかし、眼前に広がる業火にあっさり呑み込まれてしまった。

「ルーちゃんダメじゃん（なんだ、ルーちゃん普通の魔法使えるんじゃない）」

「まだまだ、これでどうだ！」

ルーファスの身体にマナが集められる。しっかりと腰を据えて詩を詠んだあとに呪文を唱えた。

「ブリザード！！」

この呪文は今世界で使われている簡略化されたレイラなどの原型になったライラと呼ばれる呪文だ。

レイラなどの呪文は唱えなくても簡単に出すことができる。だがライラはいちいち詩を詠み呪文を唱えなくてはならない。しかし、その威力はレイラなどは比べ物にならない強力なものだ。ライラは別名『神の詩』と呼ばれている高等呪文だ。

業火を呑み込ままればかりの猛吹雪。背筋がゾクゾクするほど気温も下がっている。

「ルーちゃんがライラを使えるなんて！？（学生の間際でライラを……！?）」

猛吹雪が業火を呑み込んでいく。火は風前の灯火になった。

「治まったか……?」

「ルーちゃんカッコイイ」

が、この業火はただの業火に非ず、悪魔の炎だった。

一時は勢いを失った火が再び業火となり吹雪を丸呑みにした。ルーファス愕然、ビビ啞然。

切る札とも言えるライラを使ってもなお、火を消すことはできなかった。ルーファスは決断を迫られていた。

「（もし、私がここで死ねば、私の影に依存関係にあるビビもただじゃ済まないな」

そう、恐らくルーファスが消滅すれば、ビビも解放されるのではなくとも消滅してしまうだろう。

悪魔の契約は絶対。その契約のチカラが大きければ大きいほど、リスクは大きくなり、悪魔自身の力ではどうにもならない。まさにルーファスとビビの間に成されてしまった契約はそれだった。ビビは完全にルーファスの一部として存在している。

不安そうにビビがルーファスを見つめる。

「ルーちゃん、どうしよう？（このまま消えちゃうのかなアタシたち）」

「（ここでもし私がビビに魂を全て捧げたら……）」

もし、ここでルーファスが魂をビビに全て捧げたら、火災は治まり全てを終えたビビはルーファスの影から解放されるだろう。

真剣な眼差しでルーファスがビビを見つめた。

「私の魂を全て狩るんだ。そしてこの火を止めれば……」

「ダ、ダメだよ。そんなことしたらルーちゃんが死んじゃうし、火を消すのに魂全部貰うなんて、契約を結んだ悪魔は必要以上の代償を求めちゃいけないだよ、だから……だから絶対ダメだよ!!」

自分の魂を全て狩るように言われたが、ビビは困惑した。それが使命のはずなのに……。

「このままだと二人とも死んじゃうから、だから私の魂を……（……短い人生だったな、でも仕方ないよね）」

確かにルーファスの魂を狩ることは彼女の使命のようなものだ。しかし、彼女はルーファスと長く一緒にい過ぎた。

「できないって、ルーちゃんのこと……ダメだよ絶対」
「お願いだから……」

大鎌をルーファスの頭上へと振り上げた。しかし、鎌はそこから微動だにしない。

ガタガタと大鎌が震えている。ビビの目は少し潤んでいた。

ルーファスはビビを見てやさしく微笑んだ。

「（これがアタシの使命だから……）」

そして、大鎌はルーファスに振り下ろされた。

ルーファスの魂は肉体と切り離せれ、白い煙りのような物となり、

大気中を漂い目を閉じたビビの柔らかかそうな口の中へと吸い込まれようとしている。

その時、ゴオオオン！！ という轟音とともに爆発が起きた。

ビビが目を丸くして辺を見回すと、そこにはカーシャと初老の男性　パラケルススが立っていて、火は瞬間に消え部屋には硝煙だけが残されていた。

パラケルススが叫んだ。

「ルーファスを早く！！（身体に戻さんと大変なことになる）」

ルーファスの魂は未だ大気を煙りのように漂っていた。

魂は肉体を離れて長い時間存在することができない。このままではすぐに消滅してしまう。一刻の猶予も許さない事態だ。

床を滑るようにしてカーシャが一早く動いて、ルーファスの魂を封じた。

ルーファスは助かったのか？　しかし、カーシャの顔は蒼ざめていた。

「……………しまった（カーシャ不覚……………ふふ、笑えない）」

呆れ顔でパラケルススはカーシャに向かって言った。

「自業自得じゃな（わしのホムンクルスを盗むからじゃ）」

「……………（ふふ、笑えない）」

無言のカーシャにパラケルススは話を続ける。

「罰として1週間そのままにいるように、2人ともわかったな？（ひさしぶりに高等魔法を使ったんで疲れたわい）」

「？2人？にそう命じたパラケルススは頭を抱えながら部屋を足早に出て行ってしまった。」

「ヤダよそんなの（カーシャと1週間このままなんて）」

どこからかルーファスの声が発せられた。カーシャは間違っ
てルーファスの魂を自分の影に封じてしまったのだ。

「妾だつてルーファスとこのままなんて御免だ（トイレやお風呂も
いっしょなのかもしれない!?）」

「カーシャがミスったんでしょ？」

「これでは、ビビと同じでは無いか……ふふ」

「まあ、私は死なずに済んでよかったけどね（ふう〜命拾いした）」

……この状況を見ながらビビはきょとんとしてしまっている。そ
んな彼女の元へ、パラケルススが再び姿を現した。

「忘れとったわい（この子をどうにかしてやらんと）」

笑いながら現れたパラケルススはルーファスの抜け殻となった身
体の横に立ち、ルーファスの影からいとも簡単にビビを解放してし
て、ルーファスの肉体を魔法で宙に浮かして運び、カーシャに微笑
みかけるとすぐに行ってしまった。

「あれ、もしかしてアタシ自由になったの？ やった〜v」

ジャンプしながらはしゃぎ回るビビを見ながら、カーシャは肩がくんと落として、ひどい頭痛に襲われた。

これから1週間の間、カーシャは頭痛に悩まされることとなり。ルーファスはビビの時とは違って影から出ることが全くできなかったために、暇を潰すためにカーシャに一日中話し掛け、カーシャの頭痛は酷くした。

パラケルススの実験室にビビはいた。

「ねえパラケルスス先生」

「ん、なんじゃな？」

「ルーちゃんが元に戻るまで、パラケルスス先生の助手としてここに置いてくれない？」

「ふおほほほつ。まあ、いいじやろう。ルーファスの肉体をしつかりと管理しておくれ」

「やったーっ！ ありがとう」

ビビは、ルーファスの魂から解放されたあと、パラケルススの助手として学院に少しの間居座り、ホムンクルスと一緒に保管されているルーファスの肉体の大切に管理をしていたという。

それから、もちろんルーファスの悪魔召還のテストは赤点が付いたらしい。

おしまい

第1話「桃髪の仔悪魔（完）」（後書き）

カーシャさん日記

「共同生活」 997/09/08（ガイア）

こいつがやっと寝てくれたので、ようやく日記を書くことができる。

事の発端はへっぽこが悪魔に取り憑かれたのが原因だった。

いや、この際、そんな話はどうでもいい。

今はどうしてこいつがここに一緒にいるかが問題なのだ。

しかもだ、パラケルススの奴、呪文を暗号化し、この妾でも解呪するのに時間が掛かりそうだ。

奴は1週間とかほざいておったが、知らんなそんなこと。

明日にでも解呪してみせる。

それまでは風呂もトイレも我慢せねばならんな。

……ふふ、笑えん。

番外編「ローゼンクローイツのお使い」

何の変哲もない森。

しかし、ローゼンクローイツの瞳に映る五芒星「ペンタグラム」は知っていた。

たとえ魔術により、この森全体の空間が歪曲していようと、ローゼンクローイツのエメラルドグリーンの瞳は、正しい森の姿を映し出す。

ローゼンクローイツは知っている。自分に見えないものがないことを。

日傘を差しながら小道を正確な歩調で歩いていたローゼンクローイツの瞳に生物が映った。

生物と言ってもたんぱく質などの有機物で構成されたナマモノではなく、鉄やプラスチックなどの無機物で構成された生物だ。

ローゼンクローイツは知っている。これが魔法生物と言われる存在であることを。

魔法生物が口を聞く。

「人間がシモンの里になんの用テポ」

カスタネットの上に真ん丸の目玉を二つ付けたような生物が、口らしきものをパクパクさせながらしゃべっている。

なにを思ったのかローゼンクロイツは、一瞬だけ口を歪ませてあざ笑ったような表情をし、すぐに無表情に戻して誰に言うでもなく呟いた。

「こんな変てこな生物を作るなんて、キミに創造主は変てこだね（ふにふに）」

「マスターに向かって変てこは、許さないテポ！」

口をパクパクさせるカスタネットオバケは、その口を大きく開けてローゼンクロイツに噛み付こうとした。その口に挟まれたら、ローゼンクロイツの頭なんて丸呑みされてしまう。それほど大きなガマ口だった。

けれど、ローゼンクロイツは知っている。

「……ガマ口^{ぶっ}」

その一言だけだった。ローゼンクロイツは相手の痛いところをピンポイント攻撃したのだ。

カスタネットオバケ的ショック！

一番言われなくなかったことを言われてショック！

立ち直れないくらい大ショック！！

ローゼンクロイツの精神的攻撃を受けたカスタネットオバケは、地に沈んで行きそうな勢いでブルーな気分になってしまった。

「な、なんで、それを知ってるテポ（仲間に言われて一番ショックだった言葉テポ）」

「……なんとなく（ふあふあ）」

カスタネットオバケ返す言葉なし！

灰になって燃え尽きたぜって感じのカスタネットオバケをよそに、ローゼンクロイツは歩みを進めた。

森は深く、けれど嫌な感じはせず、木漏れ日が温かい。

シモンの隠れ里。

そこは七英雄のひとり傀儡師シモンの隠れ里。

ローゼンクロイツが里に入ったとたん、里に住む魔法生物たちが騒ぎ出した。

楽器や玩具やポットみたいな日用品まで、シモンによって命を吹き込まれた魔法生物たちに取り囲まれ、ローゼンクロイツは足を止めた。

「人間がこの里になんのようだったちゃ」

魔法生物の一匹が言った。

「人間なんて嫌いテポ」

魔法生物の一匹が言った。

「人間はみんな嘘つきだに」

魔法生物の一匹が言った。

3匹が言い終えたところで、ローゼンクロイツが呟いた。

「キミたちのマスターも人間だろ（ふにふに）」

クリティカルヒット！

魔法生物たち返す言葉ナッシング！

氷のように固まってしまった魔法生物を無視して、ローゼンクロイツは歩みを進めた。

その先に見える影。

ローブを着た長身の青年が立っていた。

微笑を湛えてはいるが、眼鏡に奥に光る眼光がただの青年でないことを物語っている。

傀儡師シモン。

「こんにちは、若者よ」

春風のような声がローゼンクロイツの耳をくすぐった。

「こんにちは、傀儡師シモン（ふあふあ）」

「こちらは空に漂う雲のような声だった。

「なんの用かな、探求者よ？」

「マスタードラゴンの鱗を獲りに来たんだ（ふあふあ）」

「ふむ、この森に住むマスタードラゴンが、マスター・オブ・ザ・マスタードラゴンであることをご存知ですか？」

「知ってるよ、世界に100匹としないマスタードラゴンの中でもその頂点に立つ7匹のドラゴン（ふにふに）。この森に住むドラゴンは精霊エントの守護を受けたエントドラゴン（ふあふあ）」

「そこまでわかつているのなら、お帰りなさい」

「……拒否^{ふっ}」

ドラゴンの中でも、長い時を生きた智慧と力を持った老竜をマスタードラゴンと云う。マスタードラゴンは魔導にも精通し、その知識を求める魔導師も少なくない。そのマスタードラゴンの中でも、絶大な力を有するドラゴンこそがマスター・オブ・ザ・マスタードラゴンである。

マスター・オブ・ザ・マスタードラゴンは世界に5体存在し、別名 精霊竜 とも呼ばれ、身体に宿す精霊の力によって呼び名が異なる。

この森に隠れ棲む 精霊竜 は、身体に精霊エントの力を宿したエントドラゴンだ。

短く『拒否』と言い切ったローゼンクロイツは、古の時代に英雄とまで呼ばれたシモンを苦笑させ、さっさと歩き去ろうとした。

「……じゃ（ふあふあ）」

「少し待ちたまえ、ローゼンクロイツ君（世界でも数少ない聖眼の

使い手、人間よりも僕たちに近い存在だ」

『名前』を呼ばれローゼンクロイツの耳が微かに動くが、それでも彼は歩みを止めようとせず、シモンの隠れ里を抜けエントドラゴンの元へ行こうとした。

しかし、春風駘蕩とした傀儡師シモンの口から、ローゼンクロイツへの攻撃が炸裂した。

「本名で呼び止めましょうか？」

この言葉を聞いた瞬間、ローゼンクロイツの足はピタッと静止し、歩兵が回れ右をするみたいに中心軸をまったく動かさずにシモンの方を振り返った。

「……それは嫌（ふにゃ〜）」

あからさまに嫌な顔をするローゼンクロイツ。ワザとらしいまでに眉をひそめるその仕草は演技っぽさを感じるが、足を止めて振り返ったということは本当に嫌なのかもしれない。

空色のドレスを着た変人は、クリスチャン・ローゼンクロイツという名で通っている。その名についているクリスチャンとは、つまり聖職者を意味し、ローゼンクロイツとは本名ではなく洗礼名のことである。

世界に数ある宗教の中でも、大きな規模を持つ　ガイア聖教　の信者。それがクリスチャン・ローゼンクロイツだった。

嫌な顔から無表情に戻したローゼンクロイツは、人差し指を立て

て軽く唇に当てた。

「本名は捨てたよ（ふあふあ）。言ったら屠るからね（ふーっ！）」
屠る　つまり、里に住む全員を皆殺しにするという殺戮宣言だ。これを感じのこもってない声で淡々と、無表情で言うもんだから、怖いっただらありやしない。聖職者というのは嘘で、異端児なのかもしれない。かもというより、絶対異端児だと思う。

ローゼンクロイツを知る者であれば、これ以上はローゼンクロイツに手出しはしない。少なくともルーファスは、絶対にローゼンクロイツに喧嘩を売って命を粗末にする真似はしない。だが、相手は今となつては伝説として語られ歴史の隅に追いやられた英雄であっても、その実力たるは世界を変えることのできる存在だ。

「エンドドラゴンに合わせるわけにはいきません。お引き取りなさい（と言つても、簡単に聞き分けてはくれないでしょうけどね）」
「……………拒否^{ふひ}」

またもやローゼンクロイツは相手の言葉を簡単に跳ね除けた。相手が英雄であろうが、彼にとってはみな同じなのかもしれない。

「拒否といわれても、こちらとしてはドラグナーとしての立場もありますゆえ、そう易々とエンドドラゴンに合わせるわけにもいきません」

「それは困る（ふにゃ〜）。鱗を一枚もらえないと困る（ふにゃ〜）」

「どうしてマスタードラゴンの鱗が必要なのですか？」

「出席日数が足らなくて進級できないらしい（ふ〜っ）。知り合いのへっぴこくんは5年生に上がったのに、ボクは4年生のまま……」

ちよつと自分に苦笑（ふゝっ）」

「それでマスタードラゴンの鱗がどんな関係が？（世俗に囚われな
い物腰をしている青年なのに、なんとも世俗的な話なのだろうか）」
「教師たちはボクにもう一度4年生をやれと言ったけど、それは嫌
（ふゝっ）。だから進級するためにマスタードラゴンの鱗で手を打
ってもらつことにしたんだ（ふにふに）」

事は1週間ほど前に遡る。

新年度がはじまっても学院に顔を出さないローゼンクロイツに、
至急学院に來いと連絡があつた。

学院に呼び出されたローゼンクロイツは、そこで進級できていな
いことを告げられたのだ。ちなみに、そんなことを告げられてもロ
ーゼンクロイツは、いつもどおり無表情だったことは言うまでもな
い。

裏の手口を知っているローゼンクロイツは、進級できないと告げ
られても焦ることもなく、さつそくその足で魔導学院の教師カーシ
ヤのもとへ向かつた。

学院内でもカーシヤの地位は、決して生徒から慕われるものでは
ないが、通常ではどうにもならないようなトラブルを解決してくれ
ることから、生徒たちにとってはなくてはならない教師なのだ。も
ちろん、トラブル解決には、それなりの代償を支払わなければなら
い。

今回は特別出血大サービスで、マスタードラゴンの鱗で勘弁
してやるつ。

これがカーシャの提示した代償だった。

そして、ローゼンクロイツはマスタードラゴンの鱗を取ってくることを承諾したのだった。

ローゼンクロイツがマスタードラゴンの鱗を欲している理由を聞いたシモンは、一息ついて時間を空けたあと、笑みを湛えながら口を開いた。

「いいでしょう、エントドラゴンに会わせましょう。ただしエントドラゴンは人間がとても嫌いです」

「知ってるよ（ふあふあ）。木の精霊エントの力を宿すエントドラゴンは、自然を蝕む人間が大っ嫌いなのは有名な話だね（ふにふに）」

「せめてガイアではなく、エントに来ていただければよかったですかね」

今日は世界的に休日のガイアという曜日に当たる。エントは精霊の名であると共に、1週間の第5日目を守護し、その日の名称にもなっている。

今までずっとローゼンクロイツとシモンの会話を見守っていた魔法生物が、あわてた感じで口をパクパクさせながら二人の間に割り込んできた。

「ダメだテポ、人間をエントドラゴン様に会わせちゃダメだテポ」
「うるさいよ、ガマ口」

ローゼンクロイツの精神攻撃がまた決まった！

こうしてまたカスタネットオバケは地面沈んで再起不能にされたのだった。

コンコンというノックが聞こえ、カーシャはそのノックをした人物が誰かすぐにわかった。

「クリスちゃんだな、鍵は開いている、入って来い」

ガチャッとドアノブが音を立て、いつもと変わらぬ空色ドレスのローゼンクロイツがカーシャの研究室に入ってきた。

「獲って来たよ（ふあふあ）」

その手には、ローゼンクロイツの顔よりも大きな木の葉が持たれていた。

「なんだ、その枯葉は？（焼き芋のシーズンはまだ先だぞ）」

「魔女が取って来いってボクに言ったの、忘れたのかい？（ふにふに）」

「枯葉を取って来いなど、妾は言った覚えなどないが？」

「よく見ればわかるよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツに木の葉を渡せれ、カーシャは眉をひそめたが、すぐにその表情は驚愕へと変わった。

「ま、まさかエントドラゴンの鱗か!？」

「そうだよ（ふあふあ）。だって魔女がボクにマスタードラゴンの鱗を取って来いって言ったんじゃないか？（ふにふに）」

「戯け者かお前は……（たしかにマスタードラゴンの鱗を取って来いとは言ったが、まさかマスター・オブ・ザ・マスタードラゴンの鱗を取ってくるとはな……ふふ）」

エントドラゴンの姿はまるで木の葉の山のようにであると伝えられている。木の精霊エントの力を身体に宿したエントドラゴンは、その身体の一部を植物と化し、鱗は全て木の葉でできているのだ。

マスタードラゴンの鱗を約束どおりカーシャに渡したローゼンクロイツの姿は、すでにドアの近くにあり、カーシャに背を向けていた。

「じゃ、進級の件よろしく（ふあふあ）」

「進級ではなく、飛び級をさせてやってもいいが？（エントドラゴンの鱗ならば、進級以上の価値はある）」

「5年生でいいよ（ふあふあ）。5年生にはボクのライバルがいるからね（ふにふに）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、もう一度笑った。その笑みはいつものあざ笑いではなく、青空に浮かぶ太陽のような微笑みだった。しかし、その表情は背中越しだったためにカーシャは見ることはできなかった。もし、その表情を見ていたら、今夜のカーシャは眠れぬ夜を過ごしたに違いない。

「ところでクリスちゃん、どうやってこの鱗を手に入れたのだ？」

「……企業秘密」

「……なっ？（企業秘密だと!?)」

「じゃ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは部屋を出て行き、残されたカーシャはローゼ

ンクロイツがどつやってエンドドラゴンの鱗を手に入れたのか、結局、眠れぬ夜を過ごすことになるのだった。

おしまい

番外編「ローゼンクロイツのお使い」（後書き）

カーシャさん日記

「今年の焼き芋大会は何時なのだろう？」 997/09/16（ノーム）

放課後、妾が研究室で資料をまとめていると、クリスちゃんが尋ねて来た。

大きな枯葉を持って来たので、毎年恒例の焼き芋大会の誘いかと思っただが、それにしても時期が早い。

どうやら焼き芋大会の誘いではなく、約束の物を持ってきたらしい。

しかし、まさかエントドラゴンの……。

クリスチャン・ローゼンクロイツ、聖眼の使い手。やはり侮れんな。

いつか妾の敵となるかもしれん。

……ふふ、楽しみだ。

今はわからぬが、妾が力を取り戻したその時なら、負けることはないだろう。

第2話「リユーク国立病院の怪異（1）」

「ルーファス伏せる！！」

カーシャの声に合わせて、ルーファスは潰れたカエルのように伏せた。

「カーシャどうにかしてよぉ」

地面に這いつくばるルーファスの視線の先には、魔導学院の長い廊下と、空色の物体エックスがいた。

「ふにふにい」

空を漂う羊雲のような声を発したのは、空色ドレスの変人　ク
リスチャン・ローゼンクロイツだった。

しかも、なぜか頭に猫耳がついている。

もうひとつおまけに、しっぽまで生えている。

その姿はまさに猫人間、略して猫人。

ローゼンクロイツの無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

次の瞬間、ローゼンクロイツのお尻から生えているしっぽが、何メートルもの長さに伸びたり縮んだり、ゴムのように、鞭のように、蛇のように、魔導学院の廊下を縦横無尽にうねった。

「ひゃっ!？」

情けない声をあげたルーファスの頭上をしっぽが掠めた。しっぽが掠めたルーファスの頭は、髪の毛がなぜか逆立ってしまっている。

「カーシャ、感電死する前に逃げようよ(……って)」

カーシャがいたはずの場所には桃色ウサギ人形と置き手紙があった。

「マジでーっ!？」

思わず声をあげるルーファス。

逃げられた。

ルーファスの位置からは手紙の内容を見ることはできないが、彼にはだいたい予想がついている。

すまん、電流は苦手だ。

とでも書いてあるのだろう。なんせ、カーシャはなにかと苦手なモノが多い女だ。とにかく、なんでも苦手にして逃る。きつと逃げるのが趣味に違いない。

一本しかないはずのしっぽが何本にも見え、とにかくそこら中を勝手気ままに飛び交う。これこそ、ローゼンクロイツの必殺技のひとつ』しっぽふにふに』だ。

その『しつぽふにふに』の厄介な点は、しつぽに高压電流が流れている点だ。しつぽに流れている電流の電圧は、ローゼンクロイツの気分しだいで、強くも弱くも変わる。つまり、運がよければ肩こり解消、運が悪ければ丸焦げご臨終ということだ。

騒ぎを駆けつけて、魔導学院の黒尽くめ教員が駆けつけてきた。

「騒ぎの元凶は誰だ！」

黒尽くめ教員　ファウストの視線に乱れ飛ぶしつぽと、その根元にいる空色ドレスの猫人が飛び込んできた。

「ローゼンクロイツの猫返りか！？（クク、厄介なことになったな）」

ファウストの言う『猫返り』とは、猫耳にしつぽが生えたローゼンクロイツのことを示している。この猫返りは一種の発作であり、猫返り時のローゼンクロイツは記憶がぶっ飛び、トランス状態になる。つまり、手に負えなくなる。

性格がひねくれていることを覗けば優等生のローゼンクロイツ。性格がひねくれてるのに、『優等生なのかよ！』というツッコミは置いといて、とにかく猫返りをしてるローゼンクロイツは、大問題児の破壊者と化す。

ふにふにしていたしつぽの動きが止まった。

ファウストがいち早く動く。

「来るぞルーファス、デユラハンの盾！」

「えっ！？（な、なにが？）」

目を丸くするルーファスは脳ミソをフル回転させて、現状を分析した。

まず、ファウストは高等呪文ライラによって、防護シールドを作り出した。

とか、分析して間に来ちゃったりした。

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

「ふわふわあゝ」

来た。

ローゼンクロイツの『ねこしゃん大行進』だ！！

空色ドレスから放出される大量のねこしゃん人形。それは止まることなく、二足歩行で魔導学院の廊下に広がる。廊下を走つちやいけませんなんて、このねこしゃんたちはお構いなしだ。

ねこしゃんが放出された直後、いろんな場所から爆発音が聞こえてきた。

煙に巻かれながら、ルーファスはむせ返る。

「げげげほっ（ねこしゃん大行進が来るなんて……）」

『ねこしゃん大行進』とはカーシャが名付け親である猫返り時の

ローゼンクロイツの魔法だ。

この魔法は身体から放出される大量のネコのお人形さんたちが、二足歩行で勝手気ままに走り回り、何かにつつかると『にゃ〜ん』と可愛らしく鳴いて、手当たり次第に大爆発を起こす無差別攻撃魔法である。

二足歩行のねこしゃん人形がランダムに走り回り爆発を起こしていく。爆発が爆発を呼ぶ最悪な状況だ。

猫返りしてしまったローゼンクロイツには、人間の言葉が通じない。そのうえ、意味不明な破壊活動を行う。ある意味、最強最悪の状態なのだ。

爆発に紛れて、一匹のねこしゃんが地面に這いつくばるルーファスの元にやってきた。

ねこしゃんと目が合ったルーファスの思考一時停止。

「ストップして！」

猫語で言えば止まってくれたかもしれない。

しかし、ルーファスは猫語を知らなかった。

そして、にゃ〜んといっぱつ大爆発！！

白煙といっしょにあたりは真っ白の世界に包まれたのだった。

日差し柔らかかな正午前、一人の患者「クランケ」がリユーク国立病院に担ぎ込まれた。

ルーファスである。

爆発に巻き込まれる寸前、ルーファスは魔法壁で身を守ったが、それでも全身に細かい擦り傷を負い、軽度の火傷も数箇所、右足の骨折。そして、爆風に巻き込まれ、頭に大きなたんこぶをひとつ作って気絶した。

魔法処置で外傷はほぼ完治したが、骨折の治療には少し時間がかかるようで、2日間の入院が決められた。

副院長の計らいで、ルーファスには個室が与えられ、現在ルーファスはスヤスヤと寝息を立てて深い眠りに落ちていた。

幸せそうな顔をして眠っているルーファスに忍び寄る黒い影。その者の全身は本当に黒かった。黒い薄手のロングコートを羽織っているのだ。

黒い影から伸ばされる青白い手。

「まだ麻酔が効いているようだな」

低い男の声を発した唇は、真っ赤な薔薇のように色鮮やかだった。

青白い手がルーファスの首筋に触れた。その瞬間、氷にでも触れたような感覚を覚えたルーファスが飛び起きた。

「ひゃ!？」

奇声をあげて上体を起こしたルーファスと男の視線が合う。

「おはよう、ルーファス君。目覚めはいかがかな？」

低い声でボソボソしゃべる男の言葉を理解するのに、ルーファスは数秒を要した。

「(……ここは、病院か)あ、おはよう、デー」

デーと呼ばれた男は静かに微笑み、近くにあった椅子に腰掛けた。その間もデーはルーファスから視線を外そうとしない。ちょっと妖しい視線だ。

「君の負った外傷はすべて完治させておいた。脚の治療には少し時間を有するので2日間入院してもらうが、いいかね?(できれば、もう少し入院してもらいたものだ)」

「入院ですか?(まいったなあ、再追試があるのに)」

ルーファスは『これでもかつ!!』といった感じで包帯グルグル巻きにされている自分の脚を眺めた。脚は器具によって吊り上げられ、ベッドから身動きできない上体にされている。

このとき、ルーファスはとても嫌な予感がした。

「ああ、外傷は治したんだよね?(なのに、なんで脚が治ってないの?)」

「ああ、君に外傷は似合わんからね」

「……………(またかあ)」

なにかと病院に厄介になることの多いルーファスだが、この病院に来るとなにかと入院を勧められ、なにかと長期入院をさせられる傾向がある。その原因は今、目の前にいるこの病院の副院長の仕業だとルーファスは踏んでいる。

白衣ならぬ黒衣を身にまとった魔法医ディーと言えば、この国はおろか隣国でも有名だ。黒衣をまとう医師というだけで、少し変わり者の臭いがプンプンだが、魔法医術の腕は超一流で、リユーク国立病院が創立されて以来から、ずっと副院長の椅子に座っている。

ちなみにリユーク国立病院は、この国の4代目国王が建設した病院で、ざっとその話は250年以上前のことだったりする。つまり、魔法医ディーは長生きさんということになる。それでも、ディーの見た目は若々しく20代半ばの外見を保っているのだ。

超一流の魔法医と、包帯グルグル巻きの自分の脚を眺め、ルーファスは疑問に思う。

「この脚……治してくれないかなあ？ 明日再追試があるんだけど」「ふむ、君の脚は実に興味深い複雑な骨折の仕方をしていてね。治療には2日を有するのだよ。これでも最善を尽くして2日だ」

感情を消した表情からは相手の思惟を読み取ることはできなかったが、ディーの瞳は妖しくルーファスを見つめていた。

なぜかこのとき、ルーファスは肉食獣に喰われる感覚に襲われた。

恐怖に身を強張らせるルーファスを見つめ気持ちを察したのか、ディーは静かに微笑んで呟いた。

「君の父上には恩義がある。君には決して手を出さんよ（そして、誰にも手を出させない）」

手を出すってどういう意味だよ！！

ルーファスは生唾をゴックンと呑み込んで、素早くディーから視線を逸らした。

「（やっぱり、この人そつち系の趣味があるんだ。怖いよお）あのお仕事が詰まってるんじゃないですか？ 私に構ってないで別の患者のところに行ったほうがいいと思いますよ」

「大丈夫、心配には及ばない。君のために時間を空けてきた」

甘く囁くように呟いたディー。

ルーファスの確信は強まる一方。

この副院長は女性じゃなくて、オトコに興味があるんだ！！

とルーファスは確信した。

黒衣から伸ばされた青白い手がルーファスの首筋に触れた。とても冷たく死人のような手だったが、恐怖のあまりルーファスは逃げることもできなかった。そもそもルーファスの身体にベッドに固定されている。

ベッドに固定され、個室が与えられ、実は個室のドアには面会謝絶の札が立てかけられていたりする。

ビバ・拉致監禁！！

鮮やかな薔薇色をしたディーの口がルーファスの耳元でなにかを囁いた。

「実にきめ細かい肌をしている。この首筋を見ていると、噛み付きたくなってしまう」

「（く、喰われる！）」

そのときだった。個室のドアがガサツにドカンと開けられた。

「ルーちゃん、お見舞いに来たよおくん！」

個室に飛び込んで来た人影に、ディーはすぐさま顔を向けた。

ピンク色の髪をツインにまとめた少女 自称ちよー可愛い仔悪

魔B・B・シエリルだった。

ビビはディー×ルーファスの攻め受けの構図を目の当たりにして、顔を真っ赤にして後退りをして壁に背中をつけた。

「あ、あ、イヤっ、ルーちゃんのえっちー！（ルーちゃんのばかあ、ルーちゃんにそーゆー趣味があつたなんて）」

「ち、違っつて、誤解だよ！」

取り乱すルーファスをさし置いて、ディーは何事もなかったようにルーファスの身体から離れ、落ち着いた口調でビビに問いかけた。

「面会謝絶の札が立てかけてあつたはずだが、見えなかったのかね？」

「見たよ」

さらっとビビは言った。

「見たけど、それがどうかした？ アタシには関係ないしい」

常識に欠けるビビに面会謝絶の札は、ただの札と変わらないらしい。

「ふむ、まあよかろう。それではルーファス君、また後で……（仔悪魔の邪魔が入ってしまったな）」

デイーはルーファスの顔を妖しく見つめ、個室を音もなく去っていった。

そのときのデイーの妖しい ビビにはイヤらしいと感じた目つきを見て、ビビはやはり不審そうにルーファスの顔を覗き込んだ。

「ルーちゃん、あの人だれ？」

「この副院長だよ」

「ふ〜ん、ルーちゃんとどんな関係？」

「医者と患者の関係だけど……（あっちがどう思ってるかは自信ない）」

「ふ〜ん」

鼻を鳴らすビビは少しほったを膨らませて、そっぽを向いた。

「なに怒ってるの？（なにかしたかな、昼間の破廉恥な情事で軽蔑されたとか？）」

怒られているような気はするが、なにが原因でそっぽを向かれてしまったのか、ルーファスには検討がつかない。ルーファスにしてみれば、『なんで怒ってるんだろっ、変なの』ってくらいにしか思っていない。

ルーファスの意図しない沈黙が流れる。

けれど、そんな沈黙も長くは続かなかった。

コンコンと規則正しい音色を奏で、空色の声が室内に流れ込んできた。

「お邪魔するよ、へっぽこくん（ふあふあ）」

面会謝絶の札は立てかけてあったはずなのだが、この人物にも意味を成さないらしい。ローゼンクロイツである。

「お見舞いに来たよ（ふわふわ）。ほら、果物でも食べて元気になるといい（ふにふに）」

ローゼンクロイツの差し出したカゴには、フルーツ盛り合わせが入っていた。お見舞いの定番商品だ。そのフルーツ盛り合わせの中に入っているフルーツの定番と言えば、これだ！

「ラアマレ・ア・カピス発見」

ラアマレ・ア・カピス 通称ピンクボムを見たビビが声を弾ませた。

ピンクボムは高級高級果物として有名であり、学生の間際で、お

見舞いに持ってくる品ではない。

「ルーちゃんこれ食べていい？」

「……めっ！（ぶっ）」

答えたのはルーファスではなく、ローゼンクロイツだった。

「だめだよ、これはルーファスのために持って来たんだからね（ぶにぶに）」

「いいじゃん別に。ねっ、ルーちゃんいいよね？（早く食べたいな

あ）」

「私は別にかまわないけど……」

「……めっ！（ぶっ）」

無表情のままローゼンクロイツと頬つぺたを膨らませたビビが対峙する。

先攻ビビ！

「ルーちゃんがもらった物をルーちゃんがどうしようとしてルーちゃんの勝手でしょ。ルーちゃんがアタシにくれるって言ったんだから、これはもうルーちゃんの物じゃなくて、アタシの物よ！」

ルーちゃんルーちゃんと連呼したビビの息はすで上がっている。対するローゼンクロイツはいつもどおりの表情で、汗一つかいていない。このビビVSローゼンクロイツの構図を見る限り、ローゼンクロイツが勝っているように見えてしまう。

しかも、ローゼンクロイツの態度と来たら、こうだ！

「ところでルーファス、再追試は事故ということでも延期にしてくれるそうだよ（ふあふあ）」

ビビのこと完全無視だった。

「ちょっとあなたアタシのこと無視？（この大っ嫌い！）」

一人相撲状態のビビは頭から湯気を出して怒るが、ローゼンクロイツはまったく相手にしていなかった。

「じゃ、ボクは再追試のことを伝えに来ただけだから帰るよ（ふあふあ）」

「ちょっと、まだアタシと」

ビビの声を背に受けながら、ローゼンクロイツは背中越しに手を振って病室を出て行ってしまった。

ボタンと病室のドアが閉められ、なんだかビビちゃん敗北感！

戦う前から負けた。

けど、ビビちゃんは強い子、泣かない子。気持の切り替えだって早いんだもん。

「ラアマレ・ア・カピス食べよお食べよお」

自分の顔ほどもあるピンクボムを両手で抱え、ビビは上機嫌だった。気持の面ではローゼンクロイツに負けたビビだが、ピンクボムを手に入れたので、その点では勝ったと言えるよう。

「ルーちゃん、包丁ないの？」

「ないよそんなの」

「ええ〜っ、包丁ないと皮むけないじゃん！」

「そんなこと言われても、ない物はないよ」

「いいよ、あれ使っもん」

「あれ？（あれってなんだろう、大変なことにならなきゃいいけど）」

心配顔のルーファスのことなどすでにビビの脳内から追い出され、代わりにピンク色の果物がいっぱい詰められていた。

目の前にある果物を絶対に食べる。

ビビの手の周りの空間が歪む。

安易召喚だ。

突如として現れた大鎌がビビの手に握られていた。別空間にしまつてあったビビ愛用の大鎌を召喚したのだ。

大鎌を構えるビビの姿を見て、ルーファスは思った。

「ありえない……（あんなので果物がむけるわけないよ）」

ルーファスの予想はぴったし当たった。

「あれ、あれれえ、おかしいなあ（皮がむけないよお）」

巨大な鎌をぶんぶん振り回したり、あーでもない、こーでもないと、ビビは悪戦苦闘している模様だが、大鎌で果物の皮がむけるわ

けない。それでもビビはピンクボムとの戦いをやめない。そして、いつしかピンクボムはズタズタに切り刻まれ、見るも無残な残骸になっていくのだった。

アステア王国でのピンクボムの取引価格は1000ラウル前後である。1ラウルチョコ1000個分、うめえぼうなら500個分だ。残骸と化した物体に手を合わせ祈りを捧げよう さよならピンクボム、君のことは忘れない。

ピンクボムの果実部分は真っ赤な色をしているため、赤い物体が飛び散る床と、その現場に赤い何かが付着した大鎌を持つ少女。しかも、その少女の目は？敵？との過酷の戦いのため眼が血走っている。まさに惨殺現場だ！

「ビ、ビビ、なんか怖いよ（鎌持って眼がいちゃってるし）」
「ラアマレ・ア・カピス食べたかったのに、もういいよ！」

もうよかない現状が床に広がっているが、プンスカプンと怒っているビビは病室を出て行ってしまった。

残されたルーファスは、

「……掃除、誰がするんだろう？」

脚を包帯グルグル巻きにされているルーファスはベッドから降りることもできない。

部屋中に甘ったるい匂いが立ち込めていく中、ルーファスは床に散らばる残骸を眺めることしかできなかった。

「気持ち悪くてはきそ……」

甘い甘い匂いに包まれ、ルーファスはベッドに沈んでいった。

第2話「リニューク国立病院の怪異(2)」

その日の深夜。

トイレでルーファスは目を覚ました。

「(……漏れそう)」

ダムが決壊する寸前だった。

冷や汗をかいて顔を青くするルーファスは、すぐさまナースコールをした。

繋がらない。

ボタンを連打するが、やっぱり繋がらない。

焦るルーファス。

ボタンから伸びたコードを引っ張ってみた。すると、なんとコードが切断されているじゃありませんか！

切断面は鋭利な刃物でスパツと切ったように鮮やかだ。

「……あっ」

と、呟くルーファス。

「(ゴゴのせい)」

大正解！

今日の昼間、どっかの誰かさんが大鎌を振りまして、フルーツを細切れの虐殺したせいだった。あのときに、運悪くコールボタンから伸びたコードを切ってしまったのだ。

ルーファス的大ピンチ！

脚を無意味に包帯でグルグル巻きにされたルーファスは、ベッドから降りることができない。イコール、トイレに行けない。

これはピンチだ！

17歳になってお漏らしなんてできない。

「誰か助けてーっ！」

とりあえず叫んでみた。

しかし、声は個室に響いただけ。

こうなったら治療器具を壊してもトイレに行くしかない。

その前にとりあえず吊り下げられた右足を動かしてみる。

まったく動かない。

なぜか頑丈に固定され、ビクともしないのだ。

「これって……プチ監禁!？」

ルーファスの脳裏に浮かぶ黒い医師。

吊り下げられた脚に手を伸ばそうとするも、身体が硬くて腹筋もないルーファスには届かない。

やっぱり強引に破壊するしかなさそうだ。

破壊といっても、そんなたいした物ではなく、脚を吊ってる紐を切れはどうにかなりそうだ。

風の魔法を得意とするルーファスは、指先から小さなカマイタチを放った。

スパツと紐切ったことで、吊られていた脚がドスンと落ちる。

「うっ…… (痛い) 」

骨折した足に衝撃が加わった。

ジーンと来る痛みに耐えること数秒。

フリーズしていたルーファスがやっと起動した。

ベッドから這い降りて、片足でびよんびよん跳ねながら病室を出た。

深夜の病院は薄暗く、静かでひんやりとしている。

廊下を照らす薄暗いライトが心もとない。

「夜の病院って怖いなあ」

怖いのを紛らしてわざと口に出して言ってみた。

が、やっぱり怖いものは怖い。

幽霊は1年中いるが、運が悪いことに今のシーズンは夏。と行きたいところだが秋だったりする。

それでも心霊スポットは1年中心霊スポットである。

心霊スポットの定番のひとつと言えば病院。

病気や事故で無念を抱き死んだ者たちの霊が……。

「……絶対いない」

ルーファス真っ向否定。

ここで公定してしまったら、怖くてトイレに行けない。

負けるなルーファス！

勇気を振り絞ってトイレに向かうルーファス。

が、その足はなかなか進まない。

なぜならば、トイレにはオバケが出るから！

やっぱりオバケが怖いルーファス。

いつの時代も怖い話は子供たちの間でブームになるものである。ルーファスが魔導学園に通っていた頃も、そんな話がブームになったことがあった。

その中にはトイレにまつわる怖い話がいくつかあった。

トイレの中から手が出てきて引きずりこまれるとか、トイレが詰まって逆噴射するある意味怖い話だとか、とにかくいろいろな話があった。

そんなトイレにまつわる怖い話の中で、マスコットキャラ的な幽霊が『トイレのベンジヨンソン』だ。各地方によって伝わり方はいろいろだが、見た目はだいたい統一している。

ベンジヨンソンさんの主な特徴は、アフロヘアで犬みたいな顔をしていると言っ点だ。一説には犬憑きの人間の霊だとも言われるが確証はない。

トイレに出没するベンジヨンソンさんはどんなことをするかという、トイレトペーパーの切れた人に紙を渡してくれるのだ。ただし、１ロールにつき、財布から勝手に１０ラウルがなくなる。

そして、もし１０ラウルを持っていなければ……。

ブルブルとルーファスは身体を振るわせた。

ヤバイ、トイレに行きたくなってきちゃった。

むしろ行けない。

行きたくない。

逝くもんか。

しかし、股間のダムは決壊寸前だ。そのまま放流するわけにはいかない。

よし！

っとルーファスは拳を握って気合を入れた。

「大丈夫、トイレにいるのは妖精さんだけだ、オバケなんていないよね」

きつとトイレにはフローラルな妖精さんがいるだけだ。

ルーファスはぴょんぴょん跳ねながらトイレに向かった。

自分が跳ねる足音が静かな廊下に木霊する。それが怖くてたまらない。もしも、自分以外の足音が……と考えると身の毛もよだつ思いだ。

そこでルーファスは両耳を手で塞いだ。これで変な足音が迫ってきても聴こえない。

「迫ってきたとき聴こえなきゃ意味ないじゃん」

セルフツッコミ。

もしも何者かが迫ってきたのに気付かなければ、逃げることもできないではないか。

結局、耳は塞いでも塞がなくても怖い。

怖いものは怖い。

こづなったらこれしかない。

「(なにか楽しいことを……)」

普段あまり使わない頭で楽しいことを一生懸命考える。

考える。

……考える。

………なにも浮かばない。

なんて想像力が乏しいんだとルーファスへこむ。

ブルーな気分になって落ち込んだら、余計に今の状況が怖くなってきた。

とか思ってるうちに、ついにトイレの前まで来てしまった。

深夜でもトイレの電気は煌々と輝いていた。これならぜんぜん怖くないかもしれない。

なんだかルーファスは勇気が湧いてきた。

すんなりトイレに入ったルーファスは思わず目を剥く。

なんと不幸なことに男性用トイレ全てに故障中の張り紙あった。

しかも、個室の方も1箇所を覗いて、ドアに故障中の張り紙が張ってあるじゃありませんか。

唯一使用可能な個室は某3番目の個室。

そう、トイレのベンジヨンソンさんが出るといって個室だ！

「困った（おなか痛くなってきた）」

恐怖と緊張のあまり腹痛を起こすルーファス。

ぎゅるるるううう。

お腹が泣く。

ルーファスに選択の余地はなかった。

個室に飛び込み、念のためトイレトペーパーを調べる。

「……うそでしょ？」

紙がない。

神がない。

オーマイゴッド…！

危ないところだった。このまま知らずに用を足していたら、トイレのベンジヨンソンさんを召喚するところだった。

昔からルーファスは召喚と相性が悪い。

一刻も早くトイレを出…：れない！

閉めた覚えのない鍵が閉まってる。

ドゴドガドガドゴ！

必死になってドアを殴る蹴る。

「うツ！（蹴るんじゃなかった）」

骨折してる足で思わず蹴ってしまった。ドジだ。

ゴン！

と、ルーファスはもう一発ドアを殴りつけた。

「なんで紙がなくて、閉じ込められなきゃいけないのさ…！」
「紙イリマスカー？」

蒼ざめた顔でルーファスは辺りを見回す。

「ギヤアアアッ!？」

叫んだルーファスの視線はドアの上にある隙間に向けられていた。なんとそこに黒い手に握られたトイレットペーパーが!？

しまった……やっちゃった。

召喚しちまった。

トイレのベンジョンソンさん召喚!

先ほどまで閉まっていたドアが自然に開き、アフロヘアの人影ぐあっ!

ルーファスは声をあげるでもなく、真正面を凝視してしまっていた。

ボクサーの格好をした黒人男性。しかも犬顔をしたアフロ。

ヤヴァイ、ぜんぜん怖くない。

ベンジョンソンさんはトイレットペーパーをルーファスに差し出している。

「受け取ッテクダサイ」

カタコトの言語が胡散臭さ満点だ。

しかし、なんかの魔力なのか、ルーファスはトイレットペーパーを受け取ってしまった。

「あ、どーも。ありがとうございます」

「10ラウル貰イマス」

「はぁ？」

財布なんて持ってないし、10ラウルなんて持ってない。

「10ラウルクダサイ」

「あ、だから、ええっと……（10ラウル渡さないと、どうなるんだ？）」

ルーファスはトイレットペーパーを返そうとしたが、受け取ってくれない。

「返します」

「10ラウル」

「返すってば」

「10ラウル」

「だから返すって言うてるでしょ！」

「10ラウル！」

ついにベンジョンソンさんがルーファスに襲い掛かってきた。

しかもベンジョンソンさんってばヤル気満々。

いつの間にかベンジョンソンさんの拳には赤いグローブが嵌められ、シュツシュツと振られる拳からはなぜか赤い液体が飛び散る。

まさかその赤い液体って……。

ルーファス爆逃！

片足でピョンピョン跳ねながら逃げる。

その後ろをダッシュしてくるベンジヨンソンさん。

深夜の病院での奇怪な追いかけっこ。

長い廊下をひたすら逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

「……おかしい」

逃げてても逃げてても突き当たらない。

リユーク国立病院はアステア王国一の敷地面積がある。が、そのゆー問題以前の問題が起きているらしい。

「……同じ道じゃ……？」

そう、さっきから同じ廊下をリピートしているのだ。

こんなことでは体力が続かず、いつか力尽きてしまう。

そういえば、こんな怪談をルーファスは思い出した。

無限廊下の話だ。

永遠に続く廊下に閉じ込められた者が翌日死体となって発見された。不思議なことに、その被害者はたった1日しか行方不明になっていないはずなのに、何日も廊下を歩き続けたように痩せこけて力尽きていたのだという。

怖ッ！

廊下に閉じ込められたうえに、後ろからはベンジヨンソンさんが追ってくる。

片足ピョンピョンは想像以上につらい。

「もう……ダメだ……」

バタっとうつ伏せでルーファスは力尽きた。

「(きっとあのグローブでボコボコに殴られるんだ)」

死を覚悟したルーファスに迫るベンジヨンソンさん。その影はもうルーファスの真後ろに立っていた。

「10ラウル」

「……だからないって言ってるのに」

ぐったりと伸ばされたルーファスの手になにかが触れた。

指先に触れた冷たく硬い感触。

それを握り締めたルーファスは、顔の近くで手を開いた。

「ああっ！」

ルーファスの掌に握られていたのは、なんと10ラウル硬貨！

「やったーっ10ラウルだ！」

誰が落としたのか知らないが、落としてくれてありがとう。

ベンジョンソンさんに10ラウルを渡すと、グッドと親指を立てて笑って去っていった。

眩しすぎる笑顔だった。

「……いったなんだったんだアレ？」

トイレのベンジョンソンさん。そもそもオバケなのかもわからない。よくわからない存在だ。

腹痛はいつの間にかどっかに消えてしまったが、急な尿意がぶり返してきた。

だけど、もうトイレになんて行きたくない。

けれど、トイレに行かないと漏らしてしまいそうだ。

どうするルーファス！

そんなとき、廊下に響いた謎の足音。

ルーファスが床に這いつくばったまま、遠くの暗がりを目を凝らした。

T字路を横に抜ける影。

出たーっ！

「（絶対幽霊だ）」

と、ルーファスは思い込んだ。

謎の影が消えた方向は、ルーファスの病室がある方向だ。つまり
返り道。

怖くて帰れないし！

かといって、トイレの方向に引き返すのもイヤだ。

そうだ、もしかしたら目の錯覚だったかもしれない。

一晩に2回も超自然物体に出遭うはずがない。

オバケなんていないのだ！

と、気合を入れてルーファスは匍匐前進をはじめた。

一生懸命部屋に戻る途中、ルーファスは気配を感じて後ろを振り返った。

誰もいなかった。

気のせいかもしれないけど、怖いので匍匐前進のスピードアップ！

オマエの方が怖いよってな動きでガザガサッとルーファスは急いだ。

自分の部屋はもう目の前だ。

今日は電気をつけて眠ろう。

むしろ、朝まで起きてよう。

やっと部屋の前についてルーファスが立ち上がるうとした瞬間、向こう側からドアが開いた。

「ギヤアアアアツ！！」

悲鳴をあげてルーファスは立ったまま気を失った。

ルーファスの股間に染み渡るあつたかいぬくもりが……。

嗚呼、放尿。

ルーファス17の秋だった……。

第2話「リ्यूーク国立病院の怪異(3)」

ベッドの上でルーファスはハッと目を覚ました。

辺りを見渡すと、自分の病室だった。窓の外はいい天気らしく、空が青く輝いている。

足は昨日と同じで吊り下げられ固定されている。

まるで病室から一步も出てませんよ的な現状だった。

まさか、昨晚の出来事は全て夢だったのか？

トイレのベンジョンソンさんとの交流も夢だったの？

そうだ、あんな故障中ばかりのトイレなんて、あまりにも出来すぎな展開だ。

やっぱりオバケなんているわけないんだ。

ほっとため息をつくルーファス。

ベッドでルーファスが寛いでいると、コンコンと規則正しい音色を奏で、空色の声が室内に流れ込んできた。

「お邪魔するよ、へっぽこくん（ふあふあ）」

ローゼンクロイツだった。

「あっ、ローゼンクロイツ。今日も来てくれたんだ」

「今日も来たらしいね（ふにふに）」

らしいってなんだよ。自分のことなのに疑問系。

ローゼンクロイツはツカツカと歩いて、椅子にちよこんと座った。今日はフルーツの盛り合わせはないらしい。

「ルーファス、これあげる（ふあふあ）」

フルーツ盛り合わせの代わりにローゼンクロイツが持ってきたのは、一冊のノートだった。

「なにこれ？」

ノートを受け取ったルーファスは、パラパラっとページを開いて中身を確認した。

中には印刷されたような綺麗な文字が書かれていた。芸術的な美しい図解や図形も描かれている。これは授業ノートだった。

「もしかして僕の代わりに？（ローゼンクロイツもいいところあるなあ）」

「たまにはキミに恩を売っておくのもいいと思っただけさ（ふっ）」

腹黒いぞローゼンクロイツ！

ローゼンクロイツは一瞬だけ口をニヤリとさせ、すぐに無表情に戻った。

「ところでルーファス（ふあふあ）」

「なに？（話の切り替え早いよ）」

「さっきロビーで立ち聞きしたんだけど、昨晚この病院にオバケが出たらしいよ（ふあふあ）」

「えっ!？」

目をまん丸にしてルーファスはドキッとした。

まさかベンジヨンソンさん!？

「あのね、廊下を這う蜘蛛男が出たってさ（ふにふに）」

「はあ？」

「深夜の廊下を這う蜘蛛男だよ（ふあふあ）。悲鳴も聴こえたらしいよ（ふあふあ）」

「はあ？」

ベンジヨンソンさん意外にも、この病院にはオバケが棲み憑いているのだろうか？

実は、蜘蛛男の正体は匍匐前進をしていたルーファスだったりするのだが、そんなことなど彼は思いもしなかった。

つまり、昨晚の出来事は夢ではなかったのだ。

ローゼンクロイツは椅子から立ち上がって背を見せた。

「帰るね（ふあふあ）」

「もう?？」

「じゃ（ふあふあ）」

肩越しに手をひらひらと振って、ローゼンクロイツは病室を出て行った。

じゃなくって。

「ちょっと待ってローゼンクロイツ！」

「なに？（ふに）」

不思議そうな顔を作ってローゼンクロイツは振り返った。完全に作った大げさな表情だ。

「ノートはありがたいんだけど、今日の授業は？」

「なんだい、今日のノートも請求するのかい？（ふにふに） 図々しいよルーファス（ふにー）」

「そうじゃなくって、今日学校は？」

「サボったに決まってるじゃないか（ふあふあ）」

サラツと言った。

「新年度はじまったばかりなのにサボリ？ 今年の進級も暫定扱いなんだろう？」

「その問題なら解決したよ（ふにふに）」

「どうやって？（学院長の差し金かな）」

「魔女と取引した（ふあふあ）」

魔女とはカーシャのことである。

去年度の出席日数が足らなかったローゼンクロイツは、マスタードラゴンの鱗をカーシャに渡すことで出席人数を改ざんしてもらったのだ。

用事も済んで今度こそローゼンクロイツは去っていった。それと入れ替わるようにノックが聴こえ、黒衣の男が入ってきた。

「ルーファス君、怪我の具合はどうかね？」

今日も妖しい目つきでルーファスを見るディーだった。

ルーファスしばし無言。

「（もしかしたら昨日よりも悪化してるなんてことは口にできないから）今日にも退院できるんじゃないかなー」

「それは私が決めることだ」

「（あつそ）だよ、でも明日には退院だよね？」

「さて、それは明日になってみないとわからないとわからんな（どのような理由で病院に引きとめようか……？）」

一刻も早く退院したい患者と、なるべく長く引き止めたい医者。早く退院したいのは患者の当然の心理で、引き止めたいのは悪徳医師であれば、治療代を多く請求するよくある方法だ。けれど、この二人の場合は動悸が通常と異なる。

今もルーファスを色目で見ているディーと、見られていることに怯えるルーファス。その辺りが二人の動悸だ。

「ルーファス君、困ったことがあったら、いつでも私に相談してくれたまえ」

と、ディーの顔が近づき、逃げようにも動けないルーファス。

「（ちょっと近づきすぎ）ええっと、それでしたら早急にナースコールを直して欲しいかなあって」

「ナースコールがどうかしたのかい？」

「不思議なことにコールボタンの線が切れちゃって」

不思議なことを言いつつも、実はちゃんとビビがやったことを知っているルーファス。

「ふむ、どのコードが切れているのかね？」

ルーファスに覆いかぶさるようにディイーは身を乗り出した。

少し回り込めばいいものを、わざとルーファスに覆いかぶさり、コールボタンを調べる。

ディイーとルーファスの胸板が密着。

不可抗力でドキドキしているルーファスの心音に対して、ディイーの心臓は動いていないように静かだった。

はたから見ると、ディイーが患者をベッドに押し倒しているような光景の中、ノックもされずに病室のドアが勢いよく開かれた。

「ルーちゃん、お見舞いに来たよおくん！」

部屋に飛び込んできたビビを見て、瞬時にディイーはルーファスから退いた。

「また君かね」

デューの瞳はビビを蔑む眼つきで見ている。完全に邪魔者扱いだけれど、目では訴えてもそれを口に出すことはなかった。

デューはビビの横を通り抜け病室を出ようとした。

「それではルーファス君、また後で……（また邪魔が入ったな）」

二人っきりの部屋で、ビビはルーファスを汚い物でも見るような目で見ている。

「ルーちゃん……不潔」

「ふっ、不潔ってなに？（なんか勘違いされてるっばいなあ）」

「あのヒトとどんなカンケイなの？」

「だから、デューとは医者と患者の関係だから（向こうがどう思ってるかは別として）」

「ホントにいい？」

「ホントだってばー！」

ムキになったのが逆効果で、ビビの瞳イッパイに疑惑が湧いている。

そして、ビビはそっぽを向いて頬を膨らませた。

「ならいいけど（ルーちゃんがそっち系だったら、アタシー生トラウマになりそう）」

「（なんで怒られてるんだろう）」

会話が途切れ、気まずい空気が流れる。

ルーファスはベッドから降りられないので、この場を逃げることに

もできない。方やビビは、キツカケを失っていた。

「（このまま部屋出るの気まずいし、でも話す話題がないよぉ……）」

そんなうちにも、気まずい空気は濃度を増していく。

こんなとき、誰かが病室に訪れてくれれば……なんてことも起きてくれなかった。

なにかを思い出したようにビビは手を叩いた。

「そうだ、ルーちゃん知ってる？」

作戦、無理やり話を切り出して、さっきのことは水に流してみる。気持ちも心機一転、笑顔のビビ。笑顔をビビの得意技だった。

「なに？」

「この病院にオバケが出るらしいよ」

「蜘蛛男？」

「はぁ？（それってオバケじゃなくて怪人じゃん）」

ルーファス
蜘蛛男ではないらしい。となると、ローゼンクロイツの話してくれた話ではないっぽい。

話に乗ってきたルーファスを見るビビのキラキラ目線。ちょっと自慢げ。

「教えて欲しい？」

「いや、別に……（怖いからそんなに聞きたくないなあ）」

「もしかしてルーちゃん怖いのか？」

「ギクツ！　そ、そんなことないよ！」

「ルーちゃん焦りすぎ（ホントわかりやすいんだから）」

「焦ってなんかないよ！」

無意味に手で防御体勢をするルーファス。完全に取り乱していた。

ルーファスを困らせてやろうとビビは話を続ける。

「実はね……」

「実は……？（あんまり怖くありませんように）」

ゴクンとルーファスは咽喉を鳴らした。と同時にビビが大声を出す。

「ピョンシーが出たんだって！」

「はあ？（なにそれ）」

「ルーちゃんピョンシー知らないのか？（ダッサー、ちょーポピュラ
ーな妖怪じゃん）」

ビビの主観なので本当にポピュラーがどうかはわからない。

なんだかルーファスの恐怖は吹っ飛んだ。聞いたことも見たこと
もなく、ネーミングもそんなに怖そうじゃない。

「ピョンシーなんて聞いたことないよ。詳しく教えてよ（なんか可
愛いうサギの名前みたい）」

「元々人間の屍体んだけど、そこに闇の力が宿って怪物になるん
だよ。ピョンピョン飛んで移動するからピョンシーって名前になっ
たんだって」

「ジャンプしながら移動するアンデッドってこと？」
「うんうん、原産地は東方の国だったかなあ」

あまり怖そうな感じがしない。特にピヨンピヨン跳ねるところが、逆にユーモラスに感じられる。

けれど、実際に追いかけられたら怖いかもしれない。

ルーファスの脳裏にトイレのベンジヨンソンさんが思い浮かぶ。見た目は犬顔のアフロなのに、追っかけられたときはそれが怖かった。

「（でもあれは夢だ。絶対に夢だ）」

ルーファスは昨晚の出来事を夢と思っているのではなく、夢だと思いたみたいようだった。

「そんなわけだからルーちゃん、今夜調べてみようよ！」

唐突なビビのセリフにルーファス驚く。

「はあ!？」

「ルーちゃんの代わりにアタシが夜までに準備しとくね」

「はあ？」

「じゃあねルーちゃん、またねー！（夜が楽しみ）」

元気よく笑顔でビビは部屋を後にしていった。一度火がついたビビは止まらないらしい。

「あの、だから、足治ってないんだけど……」

ルーファスは呟いた。だが、ビビはとっくに病室を後にしていた。独り残された病室に思いため息が漏れた。

天井をポーッと眺めていると、しばらくしてノックが聴こえた。

「どうぞ」

と、ルーファスが合図をすると、ドアを数センチだけ開けて何者かの瞳が部屋の中を覗いた。

「ふふふっ、見舞いに来てやったぞ、へっぽこ」

ドアを大きく開いて入ってきたのはカーシャだった。

ここでルーファスはローゼンクロイツにもした質問をする。

「学校は？（カーシャまでサボりつてころはないよね）」

カーシャは魔導学院の教員である。

「昼休みだ（ルーファスのところに来れば、なにか面白そうなことがあると思うだと思ったが、なにもなさそうだな）」

「もう昼休みの時間なんだあ。じゃなくて、昼休みって結構すぐ終わると思うんだけど」

「いざとなれば自習にでもすればよかるう（ぶっちゃけ、ルーファスのいない学院はつまらん）」

「（そろそろこの人クビになってもいいと思うんだけどなあ）ちゃんと授業しないとクビになるよ」

「そのときはそのときだろう。ところでルーファス、茶！」

病人にお茶を出せ攻撃！

人使いが荒いという限度を越えて、カーシャは怪我人を怪我人と思つてないほど、自己中心的な女だった。

「お茶なら、そのポットで自分でいれてよ」

「客人に茶をいれさせるなど、どういう神経をしてるのだ（ホントつかえんやつだ）」

それはこっちのセリフだ。

ブツブツ愚痴を言いながらお茶をいれるカーシャ。その姿を見ながら、ルーファスはため息を付かずにはいらなかった。

「……はあ（カーシャってホント人をいたわるってこと知らないよね）。ところでカーシャ何しに来たの？」

「見舞いに決まってるだろう、アホかお前は？」

「（アホじゃないし）だってさ、わざわざ昼休み来るなんて、なんかあるのなあって思うじゃん」

「特にない」

キツパリ、アツサリ、サツパリ答え、言葉を続ける。

「しいていうなら、面白いことを探しにきた」

「はあ？」

「なにかないか？」

そんなこと突然聞かれても困る。

「なにかって言われても……病院にオバケが出たらしいって話くらいしかないかなあ」

「どうしてそんな面白いことを早く言わんのだ」

「話の流れってあるでしょ」

「よし決めたぞ。今夜この病院を搜索するぞ。もちろんお前も一緒だ（今年初の肝試しだ……ふふ、楽しみ）」

「は、はい？」

「では、また夜に来る」

勝手に話を進めてカーシャは部屋を出て行ってしまった。

残されたルーファスは呟く。

「だから足が治ってないから……」

どいつもこいつもルーファスが怪我人だということが、頭からスツポリ抜けているらしい。

頑張れルーファス！

負けるなルーファス！

第2話「リ्यूーク国立病院の怪異（完）」

夜になって、ルーファスがぐっすり眠っていると、誰かの呼ぶ声がした。

「ルーちゃん起きて、起きてっばあ」

「……あと……5分……1分でいいから……ふにゃふにゃ」

「ルーちゃんってば、寝ぼけてないで起きてよお」

「ああ……もお……もう少し……ビビ!？」

ビククリしてルーファスは目を覚ました。

「なんでビビがいるの?」

「忘れちゃったのお?」

少しビビは顔を膨らませた。

そーいえば、肝試しだか、オバケ退治だか、花火大会だか、なんかの約束をしたようになしてないような気がする。

「ホントにやるんだ(っってことはカーシャも来るのかな)」

「バッチリ準備万端だよ」

ビビはお出かけ用のショルダーバッグと、脇には松葉杖を抱えていた。

松葉杖を持ってきたことから、相手が病人だという認識はあるらしいが、その認識がありながらオバケ探しで引きずり回すのはひどい。仔悪魔ってどうか、悪魔の所業だ。

なのに満面の笑みを浮かべているビビを見ると、なんか騙されてしまう。

「早く行こうよルーちゃん（ドキドキワクワク）」

「ここまで来たら行くけどさー、その前に足を外してくれないかな？」

ルーファスの右足は吊り下げられ固定されている。心なしか昨日よりも頑丈に固定されているような気がする。

それをビビちゃんが無理やり破壊。

「出来たよ、早く行こ」

ベッドの脇には、グチャグチャになっている布やら、引き裂かれたヒモやら、強い力で曲げられたアルミパイプが……。治療代から差し引かれるに違いない。

松葉杖を受け取りルーファスはベッドから降りた。

「行くのはいいけど、どこに行くの？」

「テキトーに行けばいいんじゃないのお？」

アバウトだ。

「この病院結構広いよ」

「じゃあ……トイレとか霊安室とか行く？」

「どっちもイヤだ（特にトイレは行きたくない）」

「ワガママだなあ」

そういう問題なのか？

ピョンシーが本当にいると仮定して（ビビのモーソーの産物でない）と仮定して、ビビの話によるとピョンシーの元は人間の屍体らしい。ということは、霊安室がもっとも有力かもしれない。

しかし、ビビは――！

「末期患者を探せばいいんだよね！」

「はあ！？」

「だって屍体は鮮度が重要なんだよ（魂を狩るなら元気な人の方が美味しいけど）」

いくら鮮度が重要でも、末期患者はまだ死んでいない。

「人がいつ死ぬかなんてわからないし、人が死ぬの待つなんて失礼だよ」

「それでもアタシ魂を糧にしてるちよーカワイイ悪魔なんだけど。末期患者の死期くらいなら視えるかな（もっと修行すればいろいろんな人の死期が視えるらしいけど、メンドクサイんだよねー）」

そんなわけで、強引なビビに引きずられて病院の外にきた。

廊下はひんやりと静かだ。

耳をそばだてるビビ。

「……誰か来る！」

「えっ、どっち？」

足音が聞こえないルーファスは左右を見渡した。

すると、走っているような足音がだんだん近づいてくるのがわかった。

ルーファスフリーズ。

「ま、まさか……」

もうダッシュで近づいてくるアフロヘアのシルエット。

トイレのベンジヨンソンさんだ……！

って、なんているの……！

ビビは呆然と走ってくるベンジヨンソンさんは眺めている。

「なにアレ？」

「トイレのベンジヨンソンだよ……！」

「意味不明だよ（なにトイレのベンジヨンソンサンって）」

逃げようとしないうビビの手を引っ張り、ルーファスは必死こいて逃げ出した。

松葉杖を放り出して、ぴよんぴよん、ぴよんぴよん逃げる。

引っ張られるビビはきょとんとしている。

「なんで逃げなきゃいけないの？」

「なんでって、追っかけて来てる人見た?!」

追いかけてくるのは、犬顔のボクサー。もちろん頭はアフロヘアだ。

どう見ても怪しい!!

「でも、別に逃げなくてもお」

立ち止まったビビに合わせてルーファスも止まった。

「だって怖いでしょ、早く逃げ　　ッ!?!」

ルーファスとビビは目を丸くして口を大きく開いた。

次の瞬間、顔を蹴られてぶっ飛ぶベンジョンソンさん!!

グフッ!

冷たい廊下にベンジョンソンさんは沈んだ。

そして、10カウントが過ぎた。

カンカンカン、ゴングが鳴り響き勝者　　カーシャ!!

「はあ!　なんでカーシャがいるのさ!」

驚くルーファスの視線の先で、カーシャは静かに微笑んでいた。

「いては悪いか？」

「そういうわけじゃないけどさ、なんでベンジヨンソンさんをのしてるの……」

「こいつはベンジヨンソンさんではない。ただの変質者だ」

「そうなの？（でも話に出てくる格好と同じだけ）」

「うむ、ボクサーマニアの入院患者だそうだ」

トイレのベンジヨンソンさんでもなければ、マニアなのでボクサーでもない。ただの変質者だ。

怖がって損した。

しかし、本当に怖かったのはこの変質者だろう。

ボコボコに殴られたか蹴られたかして、この変質者の顔はボコボコで原型をとどめていなかった。誰がやったのかはあえて言わない。なんか赤い靴を履いてる人がいるけど、突っ込んではいけない。

カーシャは虫の息の変質者の足を持ち上げた。

「では妾はこやつを治安所に連行する（ふふ、懸賞金もらえるといいな）」

変質者を引きずって、ついでに赤い線を引きながら、カーシャは闇の中に姿を消した。

いったいカーシャは何しに来たんだ？

てゆうか、オバケを捜索しに来たんじゃないのか？

「てゆーか、治安所より病院が先でしょ」

と、ルーファスは呟いた。

ちなみにここは病院だった。病院で大怪我をした変質者。カーシヤに出遭ったのが運のつきだったのだろう。

偽ベンジヨンソンさんが現れたことにより、当初の目的が遠ざかってしまった。ここから軌道修正して、当初の目的を思い出そう。

そうだ、ピヨンシーを探しているのだ。

が、ここで問題発覚！

ルーファスが口にする。

「松葉杖落とした」

落し物としては、通常ではありえない落し物だ。偽ベンジヨンソンさんから逃げる際、どこかに放ってしまったのだ。

ビビは自分より背の高いルーファスを、下から丸い目で覗いた。

「元来た道にあるんじゃないの？」

「そうだね」

それほど長い距離を逃げたわけでもなく、すぐに近くにあるはずだ。おそらく、ルーファスの病室を出てすぐの場所だ。

ルーファスはびよんびよん、もちろんビビは普通に歩いて廊下を

引き返す。

すると、ルーファスの部屋が近くなってきたところで、ビビが足を止め、ルーファスも慌てて足を止めた。

ビビは口の前で人差し指を立て、『しーっ』とルーファスに合図を送った。

そして、ルーファスの部屋のドアが開くと同時に、ビビはルーファスを引つ張って曲がり角に身を隠した。

何者かがルーファスの部屋から出てきた。

足音が遠ざかっていくのを確認して、ビビは曲がり角から顔を出した。

廊下の先を歩く長身の黒い影。ジャンプで移動していないのでピョンシーではないらしい。

しかし、あの影はどう見ても人間じゃない。

長く細い腕から伸びる手の先が廊下にまで届いているのだ。

「追いかけてよ」

ビビが小声で言い、ルーファスは首を横に振った。

「ヤダよ」

「いいから行くのよ」

ビビに強引に引つ張られ、ルーファスはぴよんぴよん跳ねながら影を追いかける。

松葉杖搜索はなかったことのように忘れられている。

謎の影は用心深いようで、何度も立ち止まっては辺りを調べている。その都度、勘のいいビビが隠れ、ルーファスは冷や汗を掻きながら一緒に隠れる。

しばらくしてナースセンターの明かりが見えてきた。その明かりで、ルーファスたちは謎の影の正体を知ることになった。

謎の影の正体は、松葉杖を持ったディーだった。

松葉杖を抱えるのではなく、先を下に向けて持っていたために、腕の長い怪物に見えたのだ。

「（期待して損しちゃった）」

ビビがガツカリする横で、ルーファスはほっとしていた。

「（よかったオバケじゃなくて）」

ナースセンターに松葉杖を預けたディーが再び歩き出す。ビビはそれを追おうとして、ルーファスに引き止められた。

「まだ追うの？」

「だってこんな夜中に病院を徘徊してるなんて怪しいじゃん」

「ただの夜勤でしょ？」

「ううん、絶対怪しい（はじめて会ったときから思ってたんだよね）」

アッチ趣味疑惑とかいるんな意味で。

とめても聞きそうにないので、ルーファスは仕方なくビビについていくことにした。

再び尾行開始。

ディーはいつたいどこに向かっているのか？

しばらく歩いた後、ディーはとある病室に入ってしまった。

急患が出たのだろうか？

と、考えるのが普通だが、ルーファスはとある噂話を思い出していた。

リユーク国立病院七不思議の一つ 副院長の怪。

病院創設以来からずっと副院長だったりする魔法医ディー。最低でも300歳以上なのに、見た目は20代半ばなのだ。

まあ、そんな存在はルーファスの身近に普通にいたりする。魔導学院の教師であるカーシャだ。

かつて古の時代、アステア王国が建国されるよりも遙か以前。このウーラティア地方を支配しようとした1人の魔女がいた。と古い文献に記されている。どうやらそれが 氷の魔王 と呼ばれていた時代のカーシャらしい。

つまりルーファスの周りには、ものすごいお年寄りが普通にいるのだ。

ただし、カーシャは人間ではない。そうになると、やっぱりディーも人間ではなさそうだ。

そして、ディーにまつわる黒いウワサ。

「実はディーって吸血鬼で夜な夜な患者の生き血を啜ってるとかって……」

「うっそーマジで？」

「噂だよ噂。ほら、でもさディーって日中も病院にいるから、たぶん吸血鬼じゃないと思うけど」

吸血鬼が太陽を苦手としているというのは定説だ。

腕組みをしてビビは『うぐん』と唸った。

「ピョンシーってヴァンパイアの亜種だって聞いたことあるよー）ピョンシーに噛まれると、ピョンシーになっちゃうんだっけ？」
「だーかーらー、ディーが吸血鬼だって決まったわけじゃないから（本当に吸血鬼ならとっくに僕が餌食になってるよ）」

そんな話をしているうちにディーが病室を出てきた。すぐさま二人は物陰に隠れる。

ビビは小声でルーファスに耳打ちをする。

「きつと誰かの血を吸ったんだよ（アタシが思うに男）」

早々と歩き去っていくディーを再び尾行。

病室から離れ、病院の奥へ奥へと進む。夜の静かな世界から、より濃い闇の世界へ。

ディーが足を止めたのは霊安室の前だった。

ピョンシーの隠し場所!?

霊安室に入っていくディーを追うのは躊躇われる。さすがに霊安室まで追って入ったら、普通にバレてしまう。

でも、ビビは気になって身体をウズウズくねらせている。

「気になるよ、中に入って調べてみよ」

「ダメだよ」

「なにもなかったら『こんばんわあ』って言うっておわりじゃん」

「なにかあったら『こんばんわあ』じゃすまないよ(場合によっ

たら命にかかわるかも)」

「行くよ、ルーちゃん!」

「はあ!」

ルーファスが止める前にビビが霊安室に飛び込んでしまった。

背を向けてゴソゴソしていたディーが鋭い眼つきで振り向いた。

その口元は真っ赤に染まっている。

慌ててディーは口元を拭い、引き出しになっている屍体を安置する函を壁に押し込めた。

「キミたち、見たかね？」

冷たい口調でデューは言った。

ルーファスはこわばった顔で首を横にブルブル振った。

横に立っているビビはビシッとバシッとシャキッと、『犯人はお前だ！』的なポーズでデューを指さした。

「ピョンシーを隠してもムダだかね！！」
「……………」

デューはきょんとしてしまった。

その隙についてビビがデューの隠した函を開けようとした。

デューは必死になってビビを止めようとする。

「やめろ、開けるんじゃない！」
「この中にピョンシーが！」
「ピョンシーなんか入ってない！」
「ウソばかり！！」

そして、ついにビビは引き出しを力いっぱい開けた！

ルーファスが見守る！

デューが顔を歪める！

ビビが目を丸くする！

なんと、函の中に入っていたのは缶ジュース。函いっぱいジュースの缶が並べられていた。

ビビは1本手にとって缶を調べた。

「トマトジュース？」

「悪いか？」

デューは少し怒った様子でビビからトマトジュースを取り上げ、函の中にしまつて引き出しを閉めた。

「トマトジュースが好きでなにが悪い？」

デューはそう言うが、問題はそこじゃなくて、ルーファスがツツ
コソ。

「どうしてこんな場所にしまつてるのさ？（よりに寄って屍体の近
くなんて）」

「この場所で冷やして置けば誰にも飲まれる心配がないだろう（そ
れにこの場所が病院で一番落ち着く）」

そんなに人に盗られたくないのか！

オチのついたところで、ルーファスはどつと疲れた。

「私帰るね」

ぴよんぴよんと跳ねながらルーファスは去っていく。

「待つてよルーちゃん！」

ビビもルーファスを追って去っていった。

残されたデイーはトマトジュースを1缶開けてグビツと咽喉に流した。

「うん、美味しい」

翌日、ついにルーファス退院の日。

なんだかんだでデイーの策略により、朝一の退院が夕方まで伸ばされた。

デイーが見送りとかに来る前に、ルーファスはさっさと病室を逃げ出した。

廊下を足早に歩く途中で、向かいから空色のローゼンクロイツが歩いてきた。

「奇遇だねルーファス（ふあふあ）」

「何しに来たの？」

「キミに会いに（ふあふあ）」

それなら、そんなに奇遇ってわけでもない。

ローゼンクロイツは自分の手提げバッグからノートを取り出した。

「はい、これ今日のノートだよ（ふあふあ）」
「ありがとう」

でも、昨日分だけ抜けている。

「ところで、ルーファス知ってるかい？（ふにふに）」
「なに？」

「またオバケが出たらしいよ」
「……ああ」

なんかいろいろ心当たりがあったりする。

「ロビーで話してるオッチャンの話を立ち聞きしたんだけどね（ふあふあ）。ピョンピョン廊下を跳ねるオバケが目撃されたらしいよ（ふにふに）」
「あはは、そうなんだあ（まさかそれって……）」
「その特徴が、頭から長い触手をなびかせてるとか」
「あはは、そうなんだあ」

ローゼンクロイツの視線は、ルーファスが後ろで縛ってる長い髪をチラ見している。

そう、ここまで来たら誰もがお分かりだろう。昨日ビビが話した病院に出没したと言うピョンシーも、今日ローゼンクロイツが話した話も、ぜんぶ正体はルーファスだったのだ。

ちなみに改めて言うが、昨日の蜘蛛男もルーファスが正体だった。

病院を出たところで、早足で黒衣を靡かせディーが追ってきた。

ルーファスは気付かないフリをして逃げようとしたが、横にいたローゼンクロイツがディーと目があったために、必然的もルーファスも足を止めることになってしまった。

ディーは紙の袋をルーファスに手渡した。

「ルーファス君、忘れ物だよ」

「忘れ物？（忘れ物なんか無いと思うけど）」

学院から病院に直行したルーファスは、特に荷物も持っていないで担ぎ込まれた。

紙袋を受け取ったルーファスは顔を真っ赤にして袋を抱きかかえた。

ルーファスが目を泳がせる前で、ディーは妖しく微笑んでいる。

無表情でローゼンクロイツは尋ねる。

「どうしたんだいルーファス？（ふにふに）」

「な、なんでも無いよ！」

顔を真っ赤にしてルーファス爆走。

ドン！

ルーファス誰かとぶつかる！

「いった〜い！」

尻餅をついて倒れたのはビビだった。

「ルーちゃんばかあ！」

「ビビが私にぶつかってきたんでしょ」

「せっかく迎えに来てあげたのに」

立ち上がるうとしたビビが地面に手をつくると、その手になにか柔らかな布の感触が……？

それはルーファスの紙袋の中身だった。ぶつかったときに飛び出したのだ。

そして、それを見たビビの顔が見る見るうちに真っ赤になっていく。

「る、ルーちゃんのエッチ……！」

ビビちゃんパンチ炸裂！！

その手には思わず握ってしまった謎の布。

ぶっ飛んだルーファスにビビはその布を投げつけた。

「もおルーちゃんのこと知らない！」

仰向けになっているルーファスの顔面に乗った謎の布の正体は

ルーファスのパンツだった。

ルーファス17の秋だった……。

おしまい

第2話「リヨーク国立病院の怪異（完）」（後書き）

カーシャさん日記

「トイレのベンジョンソンさん」997/09/19（エント）

ガツカリだ。

オバケの正体はただのボクサーマニアの変質者だった。

妾は奴をボコボコにして、治安所に突き出してやった。

犯罪者を突き出せば、少しくらい金が貰えるかと思っただが、金も出なければ感謝状も出ないらしい。

それどころか、病院に忍び込んだことを注意された。

腹が立ったので今日の授業で抜き打ちテストをやった。

それから、病院を退院したルーファスが明日から登校してくるらしい。

楽しみだ、ふふふっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6134j/>

魔導士ルーファス（改行いっぱいバージョン）

2010年10月11日22時27分発行